

ベルクソン『物質と記憶』を再起動する 拡張ベルクソン主義の諸展望

平井靖史・藤田尚志・安孫子信 編

フレデリック・ヴォルムス（天野恵美理訳）

安孫子信

ポール＝アントワーン・ミケル（天野恵美理訳）

村上靖彦

増田靖彦

谷 淳（石渡崇文訳）

三宅陽一郎

平井靖史

三宅岳史

バリー・デイントン（木山裕登訳）

伊佐敷隆弘

スティーヴン・D・ブラウン（山内翔太訳）

杉村靖彦

伊東俊彦

アンヌ・ルフェーヴル（米田翼・山根秀介訳）

平光哲朗

永野拓也

谷口 薫

書肆心水

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

目 次 ベルクソン『物質と記憶』を再起動する

序 論 平井靖史 11

- 『物質と記憶』を「どうする」か 12
『物質と記憶』はなぜかくも不格好なのか〈1〉 14
ベルクソンの「科学に通じた形而上学 science-informed metaphysics」 17
『物質と記憶』はなぜかくも不格好なのか〈2〉 18
知覚の拡張としての哲学 20
イマージュとは何か 21
意識の遅延テーゼと人工知能 22
『物質と記憶』と分析哲学 24
『物質と記憶』と現代物理学 25
『物質と記憶』と精神病理学 28
記憶の何が哲学の問題となるか 29
日本とベルクソン 30

第1部 持続と生

1-1 『物質と記憶』における生 フレデリック・ヴォルムス（天野恵美理訳） 40

1-2 ベルクソンの実証的形而上学をめぐる 安孫子信 50

1. 実証的形而上学 50
2. 進 歩 51
3. 哲学と進歩 52
4. 科学と進歩 53
5. 実証諸科学 54
6. コント「三段階の法則」 55
7. コント「分類の法則」 56
8. 科学である哲学 58
9. 「デカルト主義」 58
10. 「新しいスピリチュアリズム」 60
11. 「科学の進歩」 62
12. 科学史の実在性 65

1-3

ベルクソンにおける現働的なものと潜在的なもの

.....ポール＝アントワヌ・ミケル（天野恵美理訳） 68

1. 潜在的／現働的という概念装置はどのようなものか？ 69
2. 現働性は持続において思考されるか？ 72
3. 現働的なものから潜在的なものへ 74

1-4

現象学をベルクソン化する村上靖彦 81

1. ポリリズムの現象学 81
2. イマージュと現象 86
3. 個別事例によってたつ真理——触発と潜在性の地平 90

《コラム》経験の拡張増田靖彦 97

第2部 意識と過去

2-1

脳型ロボット研究に基づく意識及び自由意志の統合的な理解

.....谷 淳（石渡崇文訳） 104

1. 緒 言 104
2. 主観と対象世界のトップダウンとボトムアップを通しての相互作用 105
3. 構成論的ロボット実験 109
4. 人間をロボット実験ループに入れる試み 114
5. ベルクソンとの接合 117

2-2

ベルクソン・モデルの人工知能への取り込み

.....三宅陽一郎・平井靖史 120

1. イマージュというフレーム 120
2. 意識はどのように時間から生成されるか 124
3. コンテキスト競合としての知能 126
4. 知覚、記憶、行動 127
5. ベルクソン哲学に基づいた人工知能理論 131

鼎談 ベルクソンと人工知能の未来

谷淳・三宅陽一郎・平井靖史 139

学習効率と記憶のハイブリッド説	139
「意図」が自己組織的に立ち上がるとはどういうことか	141
マルチタイムスケールが意識を生む	143
ハイブリッド知覚①——生きるために知覚する	145
ハイブリッド知覚②——心的イメージによる再構成	147
生の処理落ちとしての思考	149
記憶の拡張可能性	149
ベルクソン哲学に自我はあるか	150
東洋哲学と自己	153
意識を持つ身体を作るためのモデル	154
目指すべき人工知能とは	157
学習と時間	158
人工知能の精神病理	160
来たるべき人工知能の基礎理論	162
同一性の問題	163
知らないことを知っているのはなぜか	165
記憶の痕跡説	166
記憶と創造性	167

《コラム》 拡張ベルクソン主義とエンジニアリング

——持続の工学的再構成は可能か？	三宅岳史 175
補足 人工知能の用語説明	186

2-3

無時間的汎心論 バリー・デントン（木山裕登訳） 189

1. 非決定論と非-局所性 190
 2. ヘブタボッドにとっての物理学 194
 3. 物理学から形而上学へ 197
 4. 無時間的ブロック世界 204
 5. 無時間的汎心論——拡張ベルクソン主義のための枠組み？ 210
- 後記——現象的単一性 214

2-4

時間は何を保存するか

——ベルクソンにおける出来事個体の数的同一性の創設とイメージの問題

..... 平井靖史 224

1. 持続の多元論と遅延テーゼで何が扱えないのか 224
2. 保存の問題とは何か 225
3. なぜ脳はイメージを保存できないか 227

4. 他のオプション（１）——ブロック宇宙と連続創造 228
 5. 他のオプション（２）——過去の構成主義 229
 6. 非人称的な記憶力としての時間——事物と出来事 230
 7. 保存の分析（１）——イメージの内容と属性 232
 8. 保存の分析（２）——数的に同一な内容の複現可能性 235
 9. 「イメージそのもの」 242
 10. オーダーメイドの哲学 245
- 伊佐敷氏の質問への返答 247

《コラム》 持続一元論および時間の線イメージ

——平井靖史氏とバリー・デントン氏へのコメント…………… 伊佐敷隆弘 257

第３部 緊張と拡張

3-1 溺死する心——心理学にとってのベルクソンの継続的な妥当性について

…………… スティーヴン・Ｄ・ブラウン（山内翔太訳） 266

3-2

純粹記憶の「自覚」——西田幾多郎の絶対無の哲学からの（過剰）解釈

…………… 杉村靖彦 289

1. はじめに 289
2. 西田とベルクソン 290
3. 「自覚」から「場所」へ——絶対無の場所と純粹記憶の平面 291
4. 「行為的直観」と「歴史的身体」——後期西田における『物質と記憶』 296
5. 結語に代えて 300

《コラム》 記憶における「開いたもの」と「閉じたもの」…………… 伊東俊彦 304

3-3

『物質と記憶』から『想像と発明』へ

——ジルベール・シモンドンとイマージュのもう一つの理論

…………… アンヌ・ルフェーヴル（米田翼・山根秀介訳） 314

1. 第一点 315
2. 第二点 318
3. 第三点 325
4. 結 論 331

3-4

extension と縮約——『物質と記憶』第四章におけるベルクソンの直観を再考する

..... 平光哲朗 339

1. 第四章における問題とベルクソンの方法 339
2. 延長と非延長、あるいは extension の観念とその経験 341
3. 縮約の観念、その空間における考察とわれわれの持続における考察 346
4. ex-tension の経験としてのベルクソンの直観 351
5. 結 論 356
- 補 遺 357

3-5

関係と偶然——『物質と記憶』をめぐる「持続」解釈の試み 永野拓也 363

はじめに 363

1. occurrent、continuant、統合的全体（integral whole） 364
2. 概念の適用——メロディーと持続 367
3. 数学的で空間的な関係 368
4. 持続における関係としての相互浸透 371
5. 再認のシステム——『物質と記憶』におけるその記述 372
6. 記憶の統合的全体の同一性 375
7. 関係の特徴 376
8. 非決定と純粋な偶然性 378
9. 物理的状態のための continuant と自然における統合 380

《コラム》物質は自由か——『物質と記憶』によって広げられる問いとその射程

..... 谷口 薫 386

最後の言葉——夢のような、まだ夢のような あとがきに代えて 395

人名索引 401

事項索引 406

序 論

平井靖史

『物質と記憶』は、フランスの哲学者アンリ・ベルクソン（Henri Bergson, 1859-1941）の第二主著の名である。本論集の元となった国際シンポジウム「『物質と記憶』を再起動する——拡張ベルクソン主義の諸展望」は、2017 年 10 月、法政大学・明治大学・京都大学にて三日間にわたり開催された。2015・2016 年度の論集として既に出版済みの『ベルクソン『物質と記憶』を解剖する——現代知覚理論・時間論・心の哲学との接続』（以下『解剖』と略記、2016 年、書肆心水）、『ベルクソン『物質と記憶』を診断する——時間経験の哲学・意識の科学・美学・倫理学への展開』（以下『診断』、2017 年、書肆心水）に続く本巻をもって、文科省の科学研究費¹⁾を財源とした本研究チームでの『物質と記憶』の総合的研究は、ひとまずの完結を迎える。この三冊で、『物質と記憶』についてコラムを含め延べ 50 本を優に超える論考を刊行した計算になる。なお、本書所収の各論文は、以下に見るように内容面で縦横無尽に連携しているため、あえて当日プログラムの配列をそのまま再現した。以下の論述では、本書所収の論者については太字で言及する。

さて、この集中的な『物質と記憶』研究は、さらに俯瞰して見れば、2007 年に安孫子信・藤田尚志の両氏を中心に立ち上げられた Project Bergson in Japan（略称 PBJ）という長期プロジェクトの一環である。同プロジェクトは、ベルクソン哲学全体の現代的再評価に加え、日本を起点とした国際的研究ネットワークの構築を目的とし、2007-2009 年度にベルクソンの第三主著である『創造的進化』、次いで 2011-2013 年度に第四主著『道徳と宗教の二源泉』（以下『二源泉』）について、それぞれ三カ年の国際協働研究を率いてきた²⁾。その成果はフランス語で五冊刊行済みである³⁾。今回の『物質と記憶』研究は、PBJ としては第三期にあたる。それぞれ三カ年の一応は独立した科研費研究であるが、それらを繋ぐ縦糸としての長大なプロジェクトがその当初から PBJ という名前を持って活動してきたことには、大きな意味があつ

た（発案・命名は藤田氏である）。これにより各時期を跨いだ研究の数的同一性が担保されるからである。実際、フランスでは「PBJ の活動」として一貫して認知されており、研究者同士の継続的な交流の起点として今やかけがえない位置を占めている。長年にわたる研究交流により醸成されてきた知的な信頼は、シンポジウムの共同企画・共催など、国際協働研究の新しい形へと身を結びつつある。

『物質と記憶』を「どうする」か

話を今期（2015-2017 年度）の『物質と記憶』研究に戻そう。『創造的進化』と『二源泉』を扱った前二期から大きく変わったのは、研究ネットワークの学際的拡がりである。下の図 1 に示したように、分析哲学および経験科学との接合、それも当該諸分野の専門家を招いての協働研究という形を取っている点が特徴である。

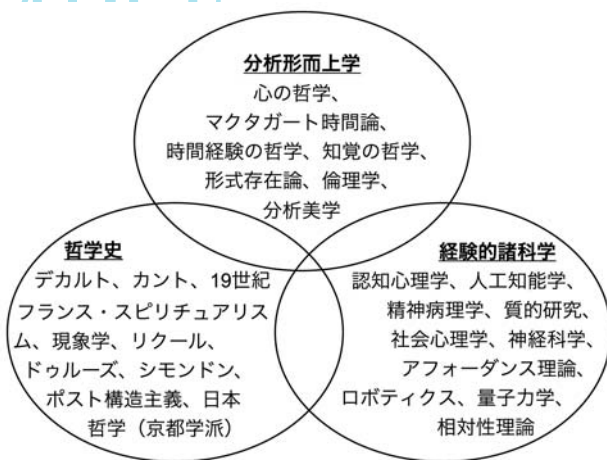


図 1 ベルクソン哲学の問題系

『物質と記憶』という書物自体が、極めて学際的な探求の書であることを考えれば当然のことと思われるかも知れない。同書は、心身問題・認識論・時間論を中心に知覚・身体・記憶・物質とひろがる哲学問題系に、生物学・生理学・心理学・病理学・物理学といった多岐にわたる諸学問の文献を駆使し単身で取り組んだ、怪物的な書物である。問題自体の性質からして哲学的にデカルトやカントとの対決は避けて通れない（『診断』カミーユ・リキエ論

文、藤田論文)。輪をかけて事情を複雑にするのが、援用される諸科学の膨大な知見だ（『解剖』三宅岳史論文）。周知のように、20 世紀の間に進んだ各分野の専門分岐のために、大規模な組織的協働なしにはその全面的再検討はなしえない。今期の研究が大規模な組織拡張を果たして目指したのは、それである。

この課題に取り組むにあたって、本研究は、ひとつの有機的全体としてのテキストを——しかもあろうことか「生の哲学者」の主著たるそれを——、「解剖する」ことから始めた。生きていたかは分からない。しかしまずは切り開き、絡み合った論述の動脈と主要な臓器をむき出しにして、ほぐし分け、組織診断にける必要があった。解剖するとは、単に部分に分割することではない。プラトンの肉屋のごとく、事象の分節に沿って刃を入れなければならないからである。機能すら知らなかった器官がたくさん見つかった。診断の結果、すでに壊死している細胞や機能不全を犯した器官があれば、最新の部品で代替することはいとわなかった。そうした介入的な試行錯誤を通じてしか、「有機的全体」を有機的たらしめている各内部系同士の相互連携、そしてそれによって同定される位置価値を見極められないということも実地で学んだ。この「聴診の哲学」（後述）を聴診するには、侵襲的であることを恐れてはいられなかった。そこまでして再起動する価値がある、と信じた。もちろん、じっさいにその価値があるかは、再起動してみなければ分からない。荒療治であったことは確かである。だが、120 年前にフランスで一人の天才的な職人が設計した〈心－時間問題 mind-time problem〉の OS を、今日の文脈のただ中に立ち上げ直し、自力で運転するところまでもって行くのに、三年がかりで数十名の研究者の力を借りてこぎ着けたのであれば、本研究の務めは果たせたことになる。

「今日の文脈」と書いたが、2015 年度から始まる第三期で『物質と記憶』を扱うことになった経緯には偶然も多く含まれるにせよ、結果として絶好のタイミングとなった。詳しくは『解剖』の序論に書いたので参照していただきたいが⁴⁾、この間に科学の分野では〈意識の諸科学〉が、分析哲学のなかではバリー・デントン氏（2015, 2016, 2017 年登壇）の功績により〈時間経験の形而上学〉が、それぞれ飛躍的に進展したことで、『物質と記憶』の早すぎたアイデアに数多くの具体的な手がかりをもたらしてくれた。これらの知見や概念装置がなければ、『物質と記憶』の読解は未だに曖昧な比喩的次元に

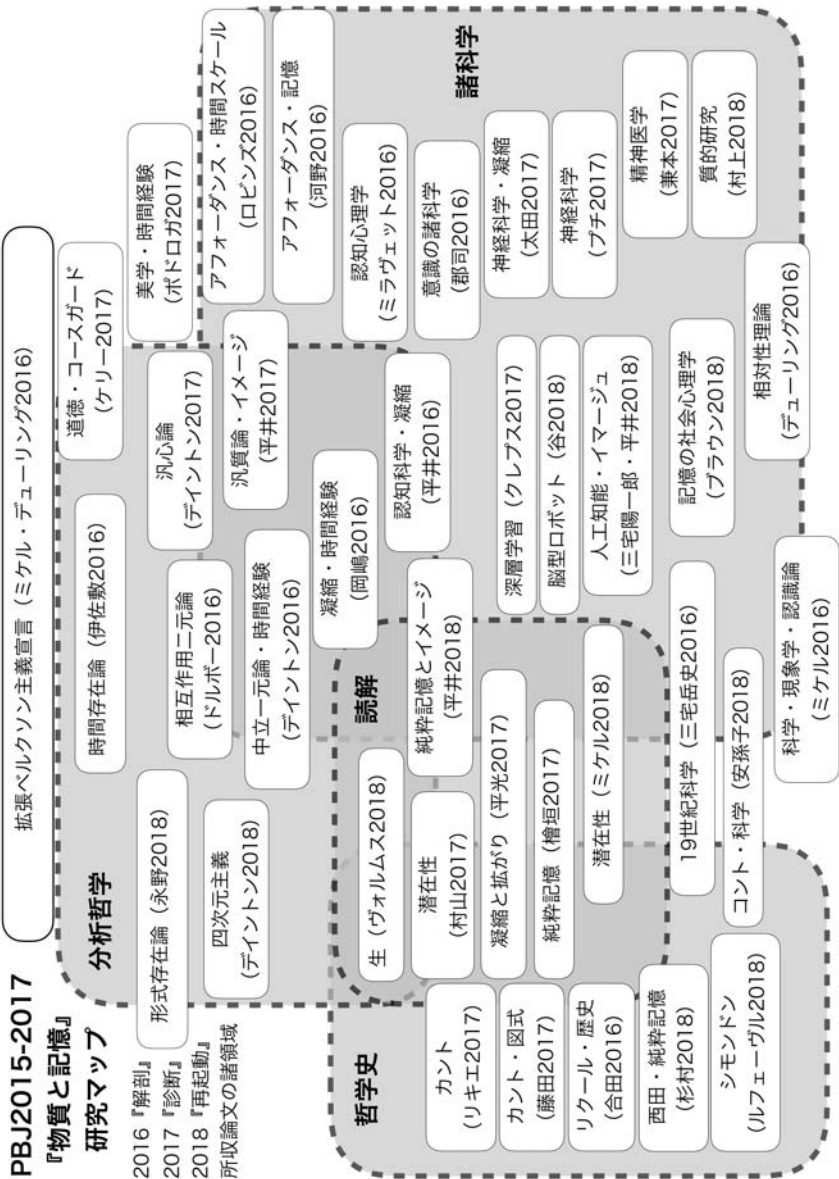
留まっていただろう。1990 年前後に脳科学が開花し（クリック、コッホ、エーデルマンら）、それを受けた研究者たちの手によって、一度『物質と記憶』の科学的検証は行われている⁵⁾。しかし、それはまだ時期尚早だった。今回の研究の視座となっているのはその次の世代、脳画像装置などの進歩を俟って、意識の発生機序についてのトノーニ、ドゥアンヌ、ガザニガ、ノルトフらの諸仮説が2010 年以降矢継ぎ早に登場する。これら全ての仮説が、〈時間的遅延〉、〈マルチ時間スケール〉という考えを通奏低音としているのは偶然だろうか。認知科学によってめざましい発見がなされ活況を呈している知覚・意思決定の諸理論がこの同じ視座を共有していることは言うまでもない（『解剖』セバスチャン・ミラヴェット論文）。ディープ・ラーニングを備えた人工知能によって機械による「イメージ認識」の学習が現実的な意味で実現したのは2012 年である（『診断』所収、デイヴィッド・クレプス論文⁶⁾）。マルチ時間スケールの脳型ロボットによって意図を創発した谷津氏（2017 年登壇）の書籍（*Exploring Robotic Minds*, Oxford）の刊行は2016 年だ。記憶の働きについて、脳科学に何が言え、何が言えないかも見えてきた（『診断』ジャン＝リュック・プチ論文、兼本浩祐論文）。遅延が意識を生み、異なる時間スケールのギャップが感覚質をもたらすという『物質と記憶』の教説を同時代の科学とともに再検討するのに、もっと早い時期では同じようには行かなかったと考える所以である。

この新しい協働研究のかたちは、2015 年に参加したポール＝アントワヌ・ミケルとエリー・デューリングによって力強いマニフェスト文（『解剖』所収）において「拡張ベルクソン主義」の命名を授かり、その名はわれわれの三年間の活動の旗印となった。

『物質と記憶』はなぜかくも不格好なのか〈1〉

かくして、本研究は、登壇者の学問分野を大々的に拡張し、「研究マップ」（図 2）に示すような布陣となった。近年では徐々に認知されてきたように、ベルクソンは現代的な意味で科学を重視し、それを血肉として哲学を展開した最初期の哲学者の一人である。「現代的」というのは、心理学と生物学が誕生した後という意味である。『種の起源』刊行の年（1859）に生まれたこの哲学者における科学の役割は、デカルトやライプニッツにおいて数学・古典物理学・論理学がそのモデルであったのとは、大きく意味を異にする。そし

図 2



て、その特徴において『物質と記憶』（1896）はベルクソンの諸著作のなかでも、突出している。科学の進歩と哲学の関係については、本書で安孫子信氏の論文「ベルクソンの実証的形而上学をめぐって」（第一部）がオーギュスト・コントの哲学史観と付き合わせつつ丁寧に論じている。ある別の研究者は『物質と記憶』を、科学を取り入れた哲学としての「議論の余地なき成功（unmitigated success）」とみなし、同書全編にわたって「科学に通じた（scientifically-informed）哲学者の模範」⁷⁾として振る舞っていると評価している。後に登場したユクスキュル、ギブソン、ミリカン、ノエといった生態学的な知覚の捉え方のパイオニアと位置づけられることは、その一つの証左である（『解剖』スティーヴン・E・ロビンズ論文、河野哲也論文）。

この哲学は、だからこそ、必ずしも「綺麗な」体系をなさない。『物質と記憶』が扱うのは、心身問題であり、認識論であり、記憶の諸問題である。しかも、人間としてできあがった状態で観察・記述するだけでなく、その発生論的メカニズムの観点から、物質世界との連続性を解き明かそうという企図である。となれば当然、「進化」の諸事情が絡んでくる。生物進化のエピソードをいくつか学び知れば、それが、論理学の演繹的な無菌性や、物理学が描く対称性の美からはほど遠い、あり合わせとその場しのぎで取り繕われた不格好なものであることを思い知らされる。『物質と記憶』のテキスト上の不格好さについては、例えば『診断』所収の檜垣論文が細やかに論じているが、まずはこの議論領域のパラダイムから来ると言えるだろう。

われわれは生命の理論的なスマートさに驚嘆するのではなく、むしろその（設計上の）呆れるほどの節操なさと、（運営上の）狡猾なまでのしたたかさ
に舌を巻く。ア・プリオリに予想されるとおりに事は進まない。言ってみれば
猥雑などさくさのなかで、質で世界を捉える意識も、過去にアクセスする
記憶も、芽生えちやうつたのだ。とするなら、意識の誕生と心の獲得をめぐる
哲学的探求もまた、「泥仕合」を約束されているだろう。だが、ベルクソンが
『創造的進化』で明かすように、期待される秩序がないときそれを「無秩序」
と呼びたいくなるのは知性の都合であり、実際には、そこには、知性の見知ら
ぬ「別な秩序」がある。概念分析と体系演繹と整合美では済まない、という
だけの話である。この別な秩序のあぶり出し作業をわれわれは「地上戦」と
名付け、シンポジウムでは各分野の専門家と、個別論点での愚直な討議に多
くの時間を割くよう、自他に命じてきた。例えば、連合型視覚失認において

記憶の一期一会的あり方が一般概念の名の下に丸められることなく露呈すること（『診断』所収、兼本論文）、脳神経ごとの反応遅延の違いゆえに相互接続において生じる時間的不整合が時間的縮約を生じること（『診断』所収、太田宏之論文）、ニューラルネットを異なる時間スケールで多層化することで意図が創発すること（本書所収、谷津論文）、等々。「時間で心を解明する」というスローガンの解像度では見えてこない理論的なディテールは、こうした果てのない泥仕合のなかでしか削り出せないからである。ディテールと言っても抽象空間のなかで重箱の隅を突くとは違う。肥沃な事実が、ア・プリオリな思弁には思いも及ばぬ新たな相を常に開陳してくれるからだ。知覚の「拡張」に、それは通じている。

ベルクソンの「科学に通じた形而上学 science-informed metaphysics」

だがこうした個別論点への沈潜は、他方で木を見て森を見ない状況を生み出すのではないか。ならば哲学は何をやっているのか。そんな危惧もあるかも知れない。これは科学と哲学はどう付き合うのかを考える上で、重要な問いである。「個別科学の諸成果を一つの大きな総合のなかに包括する」(PM, 134) だけの哲学観を、彼は痛烈なやり方で批判している。哲学の仕事は、「既成の知を手に入れて、その一般性の度合いをますます上昇させ、[...] いわゆる知の統合とかいうものに到達することではない」(PM, 135)。「科学者にとってこれほど失礼なことはない。[...] 何という奇妙なうぬぼれでしょう」(ibid.)。

大きな絵を描くことの愉悦、先にフレームを用意しておいて、そこに細部の諸事象をはめ込んで全体像をでっち上げることの誘惑に、抗し続けるのはむずかしい。確証バイアスはいくらでも「証拠」を並べてくれるだろう。もちろん、ある種の割り切りとともに、折に触れてそのような概観を得てみることに有益でありうることは、事実である。ちょうどデッサンの初めや途中に画家がそうするように。しかしそれでも、それが作業の全体であってはならない。「拡張と収縮」の往還のなかで、探求それ自身が自らの形を彫琢していくのをあくまでサポートする、それはプラトンなら助産師になぞらえる仕事だろう。だが、ことが発生論にかかわるとなると、人間との対話で迫れる事象ではない。世界と対話する人が要る。

「哲学にもっとも欠けていたもの、それが精度 (précision) である」(PM,

18⁹⁾。これは『思想と動くもの』の冒頭に収められた「緒論」冒頭の一文である。ベルクソンは、自分より前の世代の哲学者に見られた、経験的知見に依拠しない「思弁」的な「総合」の哲学を徹底的に糾弾した⁹⁾。一般に、「用語の外延を増大させるほど、その内包は減少する」(PM, 50)。ここから、有名な仕立屋の比喩が出てくる。既存の哲学体系は実在にとって「だぶだぶ (trop larges)」で、その用いる概念は事象の細部にとって「ぶかぶか (si vastes)」(PM, 1) だ。それらが「実在の寸法に合わせて仕立てられたものでない」(ibid.) からである。「ポールとピエールのどちらの形もとっていないからこそ二人に同程度に合う既製服」(PM, 196) で済ますな。実在の諸問題を扱おうとする哲学ならば、問題のそれぞれに、オーダーメイドの姿勢で取り組み。ベルクソンが「聴診」の経験主義を標榜するのはその意味においてである。以下は、日本を代表するベルクソン研究者・杉山直樹氏の書物『ベルクソン 聴診する経験論』(創文社、2006 年) にエピグラフとしても掲げられている一節である。

真の経験論とは、原文そのものをできるだけ近くからつかみ、その生命を掘り下げ、一種の精神的聴診によってその魂の脈動を感じ取ることに努める。そしてこのような真の経験論こそが、真の形而上学なのである (PM, 196)。

例によっていくぶんスピリチュアルな言い回しだが、やっていることは例の泥仕合である。心理学、病理学、生物学など、同時代の論文をかき集め、局地戦にとことん付き合う中で、そこに潜む問題そのものの形を自ら触診し、とれるところから採寸し、概念やイメージを試作する。前著の結論で次著を論じない。知覚と記憶をアナロジーで結ばない。感覚質の応用で心的表象を語らない¹⁰⁾。

『物質と記憶』はなぜかくも不格好なのか〈2〉

『物質と記憶』が信頼できるのは、そのぎこちなさゆえである。どう見ても綺麗な一枚絵として仕上がっていないのに、無骨にむき出しになった個別のディテールの背後に、そこかしこで思想の命脈を繋ごうとする概念的掘削の跡がにじみ出ているからである。どの鉱脈からどこ地表に続いているのか、

定かでない。かと思えば唐突に別の脈路へと貫通する。掘りかけのまま放置されているところもある。彼ほどのエリートならば、それをあり合わせの小洒落た生地で繕ってみせることは造作もないことだっただろう。しかし彼はそれをしなかった。それが彼なりの知的誠実さの示し方なのである¹¹⁾。これが不格好さの二つ目の理由だ。それはまさに、「別な秩序」で編まれたテキストなのである。

『物質と記憶』のテキストを実際に辿った経験を持つものなら皆知っている、どこまでも続くあの異物感。「イメージ」や「緊張／弛緩」といった諸概念が見慣れないというだけではない。議論を紡ぐ「論理」そのものが、余所で見たことがないので面食らうのだ。だがそれは「ベルクソンの」個性などといったものではない。手持ちの思考パターンの流用を許してくれないのは、どの路も、掘りながら出来た、問題の要求するところにしがたって作られた路だからだ。だから強いて言えば「問題の」個性である。

結局、哲学者には、いつでも既存の概念や思考形式を再吟味して、必要なら新しく作り直す、そういう理論のコスト——理論素材のコストではなく理論構築にかかるコスト——をいとわない自由と責務が課せられている。そのようにしてだけ、人類は経験を拡張できるからである。自らが見つけ、自らが聞き耳を立てなければ決して日の目を見ることのなかった問題のシルエットを——その断片でも——、責任もって一点物として仕立てること（仕上げられなくても）。ちょうどセザンヌがあのように描かなければ人々があのように山を見る経験を誰とも共有できなかったように¹²⁾。

ベルクソンの有名な言葉に、「どこまで行けるかを知る方法はただ一つ、自らの身で路に立ち、歩んでみること、これを措いて他にない」(ES, 2)¹³⁾というものがある。私は師である福居純先生に倣って徹底的な「ア・ポステリオリズム」と呼んでいるが、こうした方法論的な指針が、時間の実在的な機能を新規さの創出に求める彼の思想内容と通じていることは言うまでもない。これが能天気な楽観主義ととられることもあるようだが、上に述べてきたことから、むしろ徹底したリアリストというべき姿勢であることは、理解していただけたと思う。

意識や心の解明といった『物質と記憶』の扱う哲学的課題が、既存理論の応用で歯が立つような問題ではないことは、誰でも分かる。先に手順を立ててそれに準拠して、という具合には進まない。使える道具は全部使い、あら

ゆる巨人の肩を借り、なりふり構わず問題に取りかかって、できたところまでで手を止める。『物質と記憶』の比類なき「読みにくさ」は、そうした確固たる（既定の方法をもたぬという）方法的信念の証しなのだと言ったら、ベルクソンは苦笑するだろうか¹⁴⁾。

知覚の拡張としての哲学

この聴診の哲学は、だから、まさに臨床の現場で患者と向き合う人々の質的研究にふさわしい。『自閉症の現象学』（2008）の著者である村上靖彦氏の論文「現象学をベルクソン化する」（第一部）は、その刺激的なタイトルを字義通りに実践している。異なる持続のポリリズムの観点から現象学を動態化する、というだけではない。より重要なのは、安易な一般化を禁じるオーダーメイドの姿勢が、個別事例への沈潜を通じてしか得られない触発へと人を導く、という点である。それは再認的に「分かる」というのとは異なる。誰しも経験があるように、どこかで聞いた一般論を並べる安い歌詞ではなく、よく分からなくても何か単独的な事情に固有の肌理が触知されるとき、歌は心に響く。それは私の経験を変容させ、以降の世界の見え方・感じ方を変える。この哲学が芸術・美学へと接続するのも、この路からである（『診断』所収、ユリア・ポドロガ論文）。

哲学は知覚を拡張させる、とベルクソンは述べていた。アンヌ・ルフェーヴル氏の論文『『物質と記憶』から『想像と発明』へ——ジルバール・シモンドンとイマージュのもう一つの理論』（第三部）が詳しく扱うのも、この経緯である。奇しくも村上氏と同様に、（「発見」と対比された意味での）ベルクソンの「発明」の概念に着目している。彼女が鮮やかに示すとおり、この経験の拡張は、単に外的対象のうちにこれまで「隠されていた」事象を同定した、という風に進むのではなく、自己の内部システムの変容を伴い、かくして環境と自己の双方にまたがる経験構造の再組織化をもたらすのだ。

こうした考えは、その哲学的キャリアの当初から心を「異質的多様体」として、複数の内部システムからなる複合体として記述していたベルクソンの考えにわれわれを差し戻す¹⁵⁾。これが『物質と記憶』では、蓄積された膨大な過去経験が無数のバリエーションでシステム化されるという〈イメージ記憶の逆円錐モデル〉へと具体化されて結実した（下記 25 頁図 3）。これは再認と想起と人格をシステムの変形として統合的に扱う柔軟なモデルであるだ

けでなく、上述の知覚の変容とそれに基づく知的創造性を扱いうる点でも今後のさらなる解明へと開かれた論点である（『解剖』所収の論文で郡司ベギオ幸夫氏は、「逆ベイズ推論」のモデルとして逆円錐図を読み解いている）¹⁶⁾。

イメージとは何か

『物質と記憶』研究史において、ずっと抜けない棘のように刺さっているのが第一章のイメージ論である。もちろん教科書的には、〈観念論と実在論の疑似対立を脱構築するための操作概念〉ということでのよいのだが、二章の（記憶）イメージとの関係を含め、著作全体での位置づけは、何やら再帰性のゆらぎ状態に留まっている¹⁷⁾。ルフェーヴル論文は、イメージの脱主観的・脱意識的な性格について、「心」から「主観的」という語の含む何らか非実在的というコノテーションを切り離すという観点で論じている。実際、再認や想起で用いられる心的イメージは、「原始生物の時間空間双方において乏しい拮がりしかもたないシステムが、進化を通じて拡張的に変形したことによりもたらされたもの」と見なせる¹⁸⁾ 限りにおいて、外界の物質と同程度に実在的と言える。これは現代の新しい実在論の祖型となる考えであるが、現在主義・物質主義という存在論的バイアスを完全に切った上で、システム編成という観点からフラットに議論を仕切り直すことを要求する点で、変わらずオーダーメイド性が高い。だが、その射程は遠大である。

科学認識論の観点からベルクソンに取り組むポール＝アントワヌ・ミケル氏——『解剖』掲載の拡張ベルクソン主義マニフェストの共著者でもある——の論文「ベルクソンにおける現働的なものと潜在的なもの」（第一部）は、イメージ概念を前面に出してはいないものの、現働的な共存と潜在的な共外延性という二つの軸のいわば直交的な噛み合わせから、この同じ問題の論理構造に切り込んでいる（『物質と記憶』における「潜在性」概念の用法については『診断』村山達也論文）。知覚が独我論的な閉域を超えて現働的物理環境に拡がっているということを、知覚を脱心理化する（機能面に着目する）ことで示すのが、ベルクソンの純粹知覚論であったが、これが「現働的共存」である。しかしこれで終わりでない。記憶があるからである。ベルクソン哲学研究会の創設者の一人であり、現在の日本のベルクソン研究の土台を築いた故・石井敏夫の金字塔的書物『ベルクソンの記憶力理論——『物質と記憶』における精神と物質の存在証明——』は、まさにこの論証構造と格闘した書物

であった¹⁹⁾。ミケル氏は『物質と記憶』に一度だけ、「〔真の記憶力は〕意識と共外延的」(MM, 168)という形で登場するこの「共外延性」という概念を足がかりにして、現働的な物理空間への拡がり、と潜在的な時間の奥行きとの交錯を解明していく。この概念そのものが必ずしも分かりやすいわけではないが、増田靖彦氏のコラムによる解説のおかげで、彼の議論が、村上氏と同じ「経験の拡張」を狙ったものであることを読者はつかむことが出来るだろう。

なお、後述の三宅陽一郎氏は、相互作用（インタラクション）を存在単位とする〈コンテクスト競合〉という切り口から、イマージュ論の人工知能への実装可能性を論じている。

意識の遅延テーゼと人工知能

意識の発生にかんする『物質と記憶』の理論の鍵となるのは、①進化論的に説明される遅延、②それによる時間スケールの多様化（持続リズムの多元論）、そして③その結果として生じる、異なる時間スケールを跨ぐシステム論的效果としての凝縮、の三つである。解釈史上長らくまともな扱いを受けてこなかった「凝縮」理論の重要性は、『解剖』の平井論文、岡嶋隆佑論文、『診断』の太田論文、平井論文、そして本論集の平光哲朗論文と、今期 PBJ の継続的な焦点であり続けた。また、『診断』に加わった兼本浩祐氏（精神医学、2016 年登壇）は、PBJ への参加に連動する形で刊行した二冊の著書、『脳を通して私が生まれるとき』（日本評論社、2016 年）および『なぜ私は一続きの私であるのか ベルクソン・ドゥルーズ・精神病理』（講談社選書メチエ、2018 年）において、神経系進化における遅延および凝縮のテーマをそれぞれ魅力的な形で論究している。いずれも精神医学分野において『物質と記憶』を主題的に扱った書物として画期的であり、「拡張ベルクソン主義」にとって重要である。

凝縮とは何か。それは、スケールギャップからくる情報の時間的粗視化ないし圧縮の効果として新しい質が現出することである。いくつかの適用場面があるが、太田論文を踏まえて脳内過程を例にごく簡単に直感的説明を与えるなら、こうなる。われわれの脳は入力された知覚刺激を「中央クロックなしに」、つまり経路ごとに固有のペースで並列処理するようになっている。言ってみれば待ち合わせを決めずに分かれ道を進むようなものだ。当然同着でゴールなどしない。しかも枝分かれした各経路はそれぞれ複雑に層化されている。

重要なのはこれを時間軸で見ることで、上層は下層の齟齬を大きめの時間窓で丸め込む（吸収）。さらに、入力は間断なく押し寄せるので、時間単位オーバーラップの浸潤も起こる（前の上層に後の下層が入り交じる、あるいはその逆）。内的に融合・組織化された連続的時間経験が有する質的・現象的相貌を、この時間的なギャップと錯綜のシステム論的效果そのものと見るわけだ²⁰⁾。

物質世界からいかにして意識が創発するのかという課題を〈実在的な時間スケールギャップ〉によって解明するというこの早すぎたアイデアは、上に見たように今日の諸理論において多数の独立な変奏を開花させているわけだが、本年度 PBJ においては、世界的に活躍する 2 名の人工知能研究者の手により、ベルクソンの名において力強い支持を得ることとなった。

オックスフォードから上述の単著を 2016 年に刊行した谷淳氏の論文「脳型ロボット研究に基づく意識及び自由意志の統合的な理解」（第二部）は、ロボットが自発的な行動を創発するための仕組みとして、ニューラルネットの各階層に異なる時間スケールを割り当てることの重要性を示している。「マルチ時間スケール型リカレントニューラルネットワーク（MTRNN）」と名付けられている彼のモデルは、独力で『物質と記憶』の理説に到達していたことになる。なお、シンポジウム後に平井が彼の所属機関（沖縄科学技術大学院大学）でセミナーを行い、それがきっかけとなりそこの大学院生である Thomas Burns 氏、谷氏らの手により、ベルクソンのアイデアを取り込んだ MTRNN 人工知能のモデル——‘Bergson-Inspired’ と冠されたモデル——が、2018 年秋の日本神経回路学会にて発表されるに至った²¹⁾。これは、『物質と記憶』の逆円錐図に倣って、多層的時間スケール自体をダイナミックに変動させるモデルになっている。この紛れもない「拡張ベルクソン主義」のプロジェクトの今後の進展が楽しみである。

ゲーム人工知能の第一人者であり、2016 年に『人工知能のための哲学塾』（2018 年にはその続編『東洋哲学編』）を出版した三宅陽一郎氏とは、同書出版直後からコンタクトを取り、協働研究を重ねてきた。なぜゲーム人工知能か。詳しくは彼の書を繙いていただきたいが、谷氏同様、人工知能が意識を持つためには身体による環境とのリアルタイムの相互作用が不可欠であると氏は考える。出入力の連続的フローが前提としてまずあり、そこに遅延として淀みが生じることが意識のトリガーとなるからである。幸い、物理シミュレーションを備えたゲーム空間内では、現実のロボティクスの進歩を待たず

して彼のアイデアを実現できる。商用ゲームとしての諸制約を物ともせず²²⁾、アカデミックな世界で次々と成果を発表する彼のダイナミックな仕事には、圧倒的な信念が貫かれている。

その三宅陽一郎氏と平井との共著論文「ベルクソン・モデルの人工知能への取り込み」(第二部)では、ベルクソン哲学を人工知能のモデルとして再構築するとどうなるか、という試みを行った。ディシプリンを異にする両者が、同じ『物質と記憶』という素材、意識の遅延テーゼというアイデアを介して練り上げた苦心作である。なお、彼と太田氏と平井の三名で 2017 年に応用哲学会で行ったワークショップ²³⁾をもとにした論文が、人工知能学会の学会誌『人工知能』2018 年 7 月号(「意識とメタ過程」特集)に掲載され、人工知能研究者に問題提起を行っている²⁴⁾。

そのほか『物質と記憶』の諸テーゼ群と現代人工知能学の、尽きることない興味深い接点については、谷淳氏・三宅陽一郎氏・平井による鼎談「ベルクソンと人工知能の未来」(第二部)をお読みいただきたい。人工知能関連の専門用語集を含め、三宅岳史氏によるコラムでは、いつものごとく極めて懇切な解説を読めるだけでなく、思想史やテキストへとどのようにつながるか、そして今度どのような展開可能性へとひろがっているかについて、明快な案内を得ることが出来る。

『物質と記憶』と分析哲学

このような哲学が、なぜ分析哲学と交わってこなかったのか、むしろ不思議に思われるかも知れない。哲学史上よく指摘されるのは、同じくノーベル賞をとったイギリスの哲学者、バートランド・ラッセルによる「こき下ろし」であるが、当のラッセル自身、『心の分析』においては多くのページをベルクソンに割き、彼の記憶力の区分の正当性を認めるばかりでなく、「ムネメ原因」という観念まで導入して、純粹記憶の問題(記憶と過去の関係)に本格的に取り組んでいた²⁵⁾。

だが、これも『解剖』の序論で書いたとおり、状況は変わった。バリー・デイントン氏によって開かれた「時間経験の哲学」というジャンルは、今や確立した物となっている。彼の三度にわたる継続的な参加は、今期の『物質と記憶』研究の象徴的な意義を示している。今回、デイントン氏の論文「無時間的汎心論」(第二部)では、その名の通り、ベルクソンの汎心論をステップ

ングボードとして、なんと四次元主義をベルクソンに導入する！ 汎心論もまた、近年急速に関心を集めているトピックであり、ベルクソンのその先進性を『診断』の論文ですでに（同じく『診断』所収の平井論文とともに）扱っている。

もちろん従来からあるマクタガート時間論²⁶⁾、時間存在論（『解剖』所収の伊佐敷隆弘論文、平井論文、デューリング論文）、心の哲学とも無数の接点があるし（『解剖』所収のジョエル・ドルボー論文、デントン論文）、さらに知覚の哲学（『診断』所収のデントン論文では「選言主義」とベルクソンのハイブリッド説が対比された）、倫理学（『診断』所収のマイケル・R・ケリー論文）、美学（『診断』所収のポドロガ論文）への展開は、まだ端緒についたばかりと言えるだろう。

なかでも永野拓也氏の論文「関係と偶然——『物質と記憶』をめぐる「持続」解釈の試み」（第三部）は、現代の形式存在論の道具立てを用いて、ベルクソンの時間と記憶の存在論を分析するという、まったく新しい意欲的な取り組みである。ベルクソンの時間論でまっさきに目を引くのが、現在と過去をよくあるように同一線上に配置することなしに、切り離して上下に置く（逆円錐の底面 AB と面 P）という変わった図像である。過去の総体が増え続けることを考えると、逆円錐 SAB 自体の「成長」はこの図に書き込まれていないように見える。このとき、この記憶円錐は、継続的な実体 (continuant) なのか、それとも生起的なプロセス (occurrent) なのかという、まったく未開拓の問題を立てられる。目の覚めるような着眼と言うほかない²⁷⁾。谷口薫氏のコラムは、ルフエーヴル、永野、平光各氏の論文から、〈物質の自由〉という共通の潜在的テーマを析出し、刺激的な問題提起を行っている。多数の論考が織りなす錯綜体の中から、こうして多くのスリリングな理路が引き出されているのが、本論集の最大の特徴であるように思う。

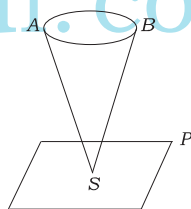


図3 ベルクソン
記憶の逆円錐図

『物質と記憶』と現代物理学

先に生物学と心理学について触れたが、当時の物理学も重要な転機にさしかかっていた。『物質と記憶』が、先行する第一主著『意識に直接与えられた

ものについての試論』（以下『試論』、1889年）と比べて大きく立場を一新した論点の一つに、「物質」というものの取り扱いがあることは、研究者の間に共通理解がある。今はその場ではないので煩瑣な論点は省略するが、『試論』において物質は、大きくは「等質的多様体」としての空間の側に配属され、理念的・形式的存在者のような扱いを受けていた（物質が持続するかについては、言葉を濁すに留まっていた）。物質の本質を「延長」と見なしたデカルトと（次元は違うが）同様の対処である。

これが、『物質と記憶』に至ると明白な変更を受ける。すなわち、抽象的図式としての「空間」と、相互作用する実在的「振動 (vibration, ébranlement)」の連続体としての物質との間に、明確な存在論的線引きが施されるようになる——一言で言えば物質も持続する——からである。ちょっと見分けにくい、ここには二つのシフトが重なっている。物質の要素についての描像と、それら諸要素が織りなす多様体についての描像である。参照されるトムソンやファラデーといった物理学者は『試論』にも登場するのだが、物質の究極単位を静的・固的な粒子と見る表象から、振動・作用という（ミクロスケールではあるが）持続者とする理解へのシフトが『物質と記憶』で起きており、この存在論的な位置づけの変化は、時間スケールの多様性（持続の多元論）を介する形で、ミクロな振動としての物質と意識を持つ生物の間の橋渡しを可能にした点で、紛れもなく理論的に重大な転換であった²⁸⁾。

その影に隠れがちだが、これと同程度に、あるいはこれにまして重要なのが、それら諸振動としての物質が構成する「拡がり (extension)」についての扱いである。本書所収の平光哲朗氏の論文「extension と縮約——『物質と記憶』第四章におけるベルクソンの直観を再考する」（第三部）がまさに主題としているこの概念は、ベルクソン自身、デカルト的（あるいは『試論』的）な意味での「延長 étendu」「空間」と区別して用いられている明確な術語である。これは、拡がりを有する物理的諸事象そのものを、それをわれわれが把握する際に（カントの言を俟つまでもなく）否応なく適用される理念的図式としての空間から、引き剥がすことを意味する。問題となっているのは、ホワイトヘッドなら「具体者置き間違いの虚偽」と呼び、ベルクソン界限では「時間の空間化」と呼ばれている、ある種の認識論的混同だ。というのも、物質と空間の混同と、持続と等質時間の混同は同じ滑り坂の上にあるからである。つまりは『試論』の段階のベルクソン自身が、これのリスクに晒されて

いたことにもなる。

アインシュタインとの対決については、近年決定的な資料がカナレーズによって公刊されたが²⁹⁾ (別な角度からは『解剖』所収のデューリング論文を参照)、相対性理論以降、マクロな物理学を論じる上で用いられるのが普通になったミンコフスキー時空は、周知の通り過去と未来を現在と同等に扱う抽象的な図式である。これに対して、空間を埋めている諸事物そのものが同様の拮がりをもつとみなす存在論的立場が、昨今隆盛を極めている。四次元主義である。もちろん、四次元主義をサポートする根拠は相対性理論だけではないが、逆に、ミンコフスキー時空の正当性は四次元主義存在論を何ら正当化しないという趣旨の論文が、ここ数年に出始めている³⁰⁾。なお上に触れたように、今回デイントンは、現代物理学の詳しい読解と 2016 年の SF 映画『メッセージ』を素材に、汎心論と四次元主義の驚くべき組み合わせを提案し、しかもこれを彼自身の「延長主義」時間経験、したがってベルクソンの持続と両立させる試みをしている。

量子力学に関してとりわけ興味深いのは、その礎を築いたことで著名なフランスの理論物理学者ド・ブロイ (本書デイントンの論文に解説あり) が、早くも「現代物理学の諸概念と、時間および運動についてベルクソンの考え」(1947)³¹⁾ のなかで、この (時空を埋める実在と、表象としての時空の) 峻別の重要性についてベルクソンを高く評価していることである。やや長くながるが、以下に引用する。

延長を等質的な幾何学的空間によって表象することが図式的に過ぎるということはありうるし、物質世界の延長を抽象的な枠組みにおける局所化の並置へと粉碎してしまう点で誤っているということはある。とはいえ、そしておそらくこれがベルクソンが延長よりも持続のケースにこだわった理由でもあるが、時間の流れを等質的な軸に沿った移動として表象することは、感じられる実在が有する疑い得ない性質をさらに完全な仕方では放棄してしまうことを含意している。抽象的な表象の中であら、実際の持続が呈する最も確かな性質に反して、時間の流れを反転しようと想定することを妨げるものは何もなく、また、ベルクソンがしっかり指摘していたように、時間の流れが無限の速度で進行し、世界の過去・現在・未来の全歴史を眼前に瞬間的に展開されるようにすることを

妨げるものもまた何もない。そして実際に、こうした表象こそが、われわれの経験の直接与件の一切に根本的に反する形で、相対性理論が過去・現在・未来の出来事全体を抽象的な四次元連続体、時空の枠組みのうちに表象するように誘うとき、見いだされるものなのである（強調引用者、p. 49）。

量子力学についてのベルクソン自身の見解については、以下を引いておこう。1934 年、最後の刊行物となった『思想と動くもの』に書き下ろした文章からである。

私が本を書き始めたころ、物理学は物質の構造に関する諸観念を革新する決定的な進歩をまだ遂げていなかった。しかし私は当時から不動性や不変性は動きと変化に対して撮られた写真にすぎないと確信していた。[……] 原子や微粒子や究極的な要素のイメージ化をやめようとしても、それはなかなか難しい。どうしても運動と変化を支える事物が出てきてしまい、したがってその事物自体は変化も運動もしないことになる。しかし遅かれ早かれ、支えという観念を放棄しなければならないだろうと私は思っていた。[……] 遅かれ早かれ物理学は要素の固定性を動きの一形式と見るようになって思っていた。その日が来ればもちろん、科学はおそらく動きをイメージで表象しようとはしなくなるだろう。なぜなら、運動のイメージとは、動く点の（つまりは相変わらず固定した微小物の）イメージだからである。実際、近年のさまざまな理論的大発見によって、物理学者は波動と粒子のあいだに、私に言わせれば運動と実体のあいだに一種の融合を想定するにいたっている（PM, 76-78）。

『物質と記憶』と精神病理学

精神病理学については、先に兼本浩祐氏の最新著書を挙げたが、谷氏・三宅氏・平井の鼎談では、内海健氏の『自閉症スペクトラムの精神病理』（医学書院、2015 年）も言及される。谷氏も三宅氏も、病理可能性を意識の内在的構成要件（偶発的オブションではなく）と捉える非常にベルクソン的な観点で仕事をしており³²⁾、その観点から内海氏の著作は共通の話題となった。

この、生と病理の相即性を中心に据えるのは、今やフランス哲学界の重鎮

とも言えるフレデリック・ヴォルムス氏の論文『物質と記憶』における生（第一部）である。彼が『再起動』シンポジウムのちょうど 20 年前、1997 年に刊行した『ベルクソン『物質と記憶』入門』（*Introduction à Matière et mémoire de Bergson*, puf.））を手に取らないベルクソン研究者はいないであろう。『物質と記憶』全編にわたって施された、簡にして要を得た問題の整理は、未だに色褪せない。今回の論考では、2013 年に刊行された『ベルクソン、あるいは生の二つの意味』（*Bergson ou les deux sens de la vie*, puf.）を踏まえる形で、『物質と記憶』に錯綜する様々な問題系を俯瞰的に方向付ける準拠軸として、〈均衡的な生／病理的な生〉という、生そのものが内包する根源的な二面性について論じている。その後の精神医学にベルクソンの与えた広範な影響については、ヴォルムスが挙げるように、フロイト、カンギレム、E・ミンコフスキー、ジャンケレヴィッチといった錚々たる面々が証し立てている。

こと幻覚に関しては、このリストにアンリ・エー（Henri Ey, 1900-1977）の名前を、その影響力の大きさ——格別に日本におけるそれ——から付け加えることも許されるだろう³³⁾。『物質と記憶』第二章の再認識は、そもそも健常な知覚自体が、外因的な知覚成分を基礎としつつも、大部分がそこに投射される内因的な記憶イメージからなることを示していた（『解剖』平井論文、『診断』デイントン論文）。いわゆる「真正な」知覚が、睡眠時に見る夢と同じように、初めから「ほぼ幻覚」なのである。健常者が真実を見、異常者が幻を見ているのではない。別な秩序による幻覚を見ているのである。かくして、イメージ記憶に基づいた再認識こそが、統合失調症における幻覚を、むしろ減算的に説明することを可能にした。決定的に重要なこのコペルニクスの転回が表明されるのが、『物質と記憶』第三章なのである。

記憶の何が哲学の問題となるか

こうして『物質と記憶』の大動脈を、記憶が繋いでいる。ベルクソンの想起理論の最大の特徴は何か。それは、想起内容の心理的な歪曲可能性と想起対象の存在論的な実在性とが矛盾なく両立する——ミケル流には「共外延である」——ことを、記憶イメージと純粋記憶の二元性によって理論化した点にある（『診断』檜垣立哉論文）。

伊東俊彦氏のコラムが明快に示すように、ベルクソンのイメージ記憶の理

論は、想起が現在の有用性の都合でその都度編集される（その意味で過去に忠実でない）ことを、その中心的なテーゼとしている。社会心理学者であるスティーヴン・D・ブラウン氏の論文「溺死する心——心理学にとってのベルクソンの継続的な妥当性について」（第三部）で紹介されるロフトスの「ショッピングモール実験」は、この点で非常に有名である。しかし、この記憶の可謬性と、過去それ自体（純粹記憶）が保存されており、われわれがそれを直接想起の対象とすることは、なんら排他的でない。平井靖史の論文「時間は何を保存するか——ベルクソンにおける出来事個体の数的同一性の創設とイメージの問題」（第二部）は、この点から、一步進んで過去と記憶の数的同一性の問題に切り込む。純粹記憶と想起されたイメージは、数的に同じものでありながら区別される。そこに潜む奇妙に捻れた論理的关系は、なんであれ過去に属するものがいかにして時間的な意味で数的に保存されるかという謎にかかわっている。なお、『解剖』の論者でもある伊佐敷隆弘氏のコラムでいただいた平井への質問については、論文末尾に返答を載せた。同氏のデイントン氏への疑問については、別な機会に返答が得られることを期待したい。

記憶の社会的な側面、すなわち必ずしも個人のものではなく、他者との相互作用へと開かれているという論点について、ブラウン氏はDavid Middletonとの共著 *The Social Psychology of Experience: Studies in Remembering and Forgetting* (SAGE, 2005) において、普通ベルクソンに批判的とみられるモーリス・アルヴァックスを援用しつつ、詳しく論じており、本書論文でもその論旨を辿ることが出来る。また、この「共通の過去 (joint past)」(他者と共有される過去) という論点は、実在的過去を直接に想起するベルクソンモデルが、いわば「記憶版の独我論」を脱却する射程をもつことを示唆する点で興味深い。

日本とベルクソン

もう一点、是非とも触れておきたいのが、全世界の研究者の協力を仰いだベルクソンの再検討を率いる PBJ が、ここ日本を拠点にしていることの意味である。PBJ そのものの発足については、上にも触れたとおり当時の代表の安孫子氏他科研費メンバーそれぞれの個人研究者としての才覚によるわけだが、それを支える日本のベルクソン研究の裾野の広がり、在野まで含めたその知名度の高さには、もっと深い歴史的要因があるように思える。

一般的に言って日本とフランスの文化的な絆は哲学に限らず非常に深い、ベルクソンに关する日仏の結びつきについては、その翻訳の版の数に見ることができる。『試論』は、その初の邦訳（1925）から竹内信夫訳（2010）までに実に 10 種類が刊行されている（同一訳者による版違いはカウントしていない）。よりハードルの高いと思われる『物質と記憶』でも、近刊の杉山直樹訳を含め 8 種類である³⁴⁾。

導入の最初期において、二人の重要な人物が深くかかわっている。西田幾多郎と夏目漱石である。郡司良夫の調査（注 34 参照）によれば、西田の日記に『試論』への言及が登場するのが 1908 年、そして最初の論考として「ベルクソンの哲学的方法論」が『藝文』に発表されるのが 1910 年である。世界で、最初の英訳が出るのが 1910 年、独訳が 1911 年であることを考えても、極めて早い。この西田哲学の、『物質と記憶』にかかわる恐るべき射程を正面から論じたのが、杉村靖彦氏の論文「純粹記憶の「自覚」——西田幾多郎の絶対無の哲学からの（過剰）解釈」（第三部）である。フランス現代哲学・宗教哲学を専門とするだけでなく、西田や田辺など日本哲学においても類い希な業績をもつ杉村氏によってしか描き出すことの出来ない、緻密にして刺激的な論点がそこには溢れている。伊東氏のコラムで指摘される歴史性・社会性の論点は、『解剖』の合田正人論文、ブラウン論文との接点を照射するだけでなく、『二源泉』への通路も開く。形而上学的な論点としては、「実在を裏打ちし絶えずこれを再構成する」働きとして、西田の「無の鏡」とベルクソンの純粹記憶とを——知覚と記憶の同時生成説を梃子に——接合してみせるその鮮やかな理路は、それ自体驚嘆に値するものであると同時に、『物質と記憶』に頻出する「鏡」「反射」の問題系へ紛れもなく新しい光を投げ返すものともなっている。日本哲学とベルクソンの交錯については、PBJ 第一期のミッシェル・ダリシエ論文（2012）や、第二期最新刊（2018）の第三部「ベルクソンと日本哲学」（注 3 を参照）などにおいて、これまでも繰り返し論究されてきた。

漱石については、日記に『試論』への言及が登場するのが 1910 年、翌 1911 年には『試論』の第二章を（英訳で）読み進めていることが窺える記述がある。この『試論』英訳への書き込みが有名である一方、『物質と記憶』については、あいにく知られている限り直接の言及はないが、興味深いことに、1915 年から連載された『道草』の四五節に『物質と記憶』の走馬灯に関する学説

(MM, 172)が登場する。

彼はその青年に^{フランス}仏蘭西のある学者が唱え出した記憶に関する新説を話した。／人が溺れかかったり、または絶壁から落ちようとする間に、よく自分の過去全体を一瞬間の記憶として、その頭に描き出す事があるという事実に、この哲学者は一種の解釈を下したのである。／「人間は平生^{へいぜい}彼らの未来ばかり望んで生きているのに、その未来が咄嗟^{とつさ}に起ったある危険のために突然塞がれて、もう己は駄目だと事が極^{きま}ると、急に眼を転じて過去を振り向くから、そこで凡ての過去の経験^{すべ}が一度に意識^{のぼ}に上るのだというんだね。その説によると」

「漱石山房蔵書目録」には『試論』と『創造的進化』、そして『笑い』のそれぞれ英訳しか残されていないが、『物質と記憶』の最初の翻訳（英独訳からの重訳）である高橋里美訳が1914年に出ていることから、これを用いた可能性もある。

その後戦争を挟んで上述の翻訳ラッシュは続くが、大きな事件は1958年に小林秀雄がメジャーな文芸雑誌『新潮』上でベルクソン論「感想」を始めたことだろう。これはおよそ6年もの期間に及び、その間膨大な読者の目に、この著名な文芸評論家によるベルクソン哲学との生々しい——ほとんど赤裸々と言っていい——格闘は鮮烈な印象を残したはずである。終わり近くで『持続と同時性』に取りかかるまでの大半が、『物質と記憶』読解の苦闘の記録である。

今期 PBJ の研究が、分析哲学や科学との協働に力点を置いたのは事実である。だがそこから描き出すことが出来たのが、『物質と記憶』という書物がもつ広大な知的喚起力の、あくまで一つの側面に過ぎないこともまた、こうした歴史を振り返れば痛烈に思い知らされることでもある。研究期間の締めくくりに日仏哲学会において行われた総括的な趣旨のワークショップ³⁵⁾の場で、杉村氏が示唆したのはその点であった。

以下の一節を引いて、この序論を閉じる。

彼は怠惰にも、直線的な論理というものに則って結論を引き出すことに

身をゆだねてしまう。すると突然、今度は自分自身の主張を前にして、当初他者の主張に抱いたのと同じ、あの「ありえない」という感じを抱くことになる。自らの思考の曲線から逸れて、接線をまっすぐに辿ってしまった結果、自らに対して外的となってしまったわけである。この離脱と回帰によって、教説の「発展」というものができあがる。すなわち、我を見失い、また取り戻し、自らを無際限に訂正していく教説の動きである（PM, 121）。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

注

- 1) 平成 27-29 年度科学研究費補助金・基盤研究 (B)「ベルクソン『物質と記憶』の総合的研究——国際協働を型とする西洋哲学研究の確立」(課題番号: 15H03154)
- 2) この期間の詳しい研究体制については、『解剖』に寄せられた藤田尚志氏による「はじめに」にその記録がある。注 4 も参照。
- 3) 単行本として、あるいは権威ある研究専門誌である『ベルクソン研究年鑑 (Annales Bergsonniennes)』の特集号として以下の五冊が公刊されている。

Shin Abiko, Hisashi Fujita et Naoki Sugiyama (éds.) (2012), *Disséminations de L'évolution créatrice de Bergson*, Georg Olms Verlag, coll. "Europaea Memoria".

Arnaud François, Camille Riquier et Shin Abiko (éds.) (2013), *Annales bergsonniennes, VI: Bergson, le Japon, la catastrophe*, PUF, coll. "Epiméthée".

Shin Abiko, Hisashi Fujita et Masato Goda (éds.) (2015), *Tout ouvert: L'évolution créatrice en tous sens*, Georg Olms Verlag, coll. "Europea Memoria".

Shin Abiko, Hisashi Fujita, Yasuhiko Sugimura (éds.) (2017), *Considérations inactuelles. Bergson et la philosophie française du XIXe siècle*, Georg Olms Verlag, coll. "Europaea Memoria".

Shin Abiko, Hisashi Fujita, Yasuhiko Sugimura (éds.) (2018), *Mécanique et mystique. Sur le quatrième chapitre des Deux Sources de la morale et de la religion de Bergson*, Georg Olms Verlag, coll. "Europaea Memoria".

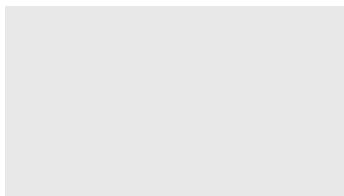
- 4) 『解剖』の一部 (はじめに、目次、序論の一部、索引) を書肆心水のホームページで読むことができるのでご参照いただければ幸いです。http: //www.shoshi-shinsui.com/book-bergson2015.htm
- 5) Philippe Gallois & Gérard Forzy (eds.) (1997), *Bergson et les Neurosciences*. Institut Synthélabo ; John Mullarkey (ed.) (1999), *The New Bergson*. Manchester University Press. さらに先駆として以下も挙げる。Andrew C. Papanicolaou & Pete A. Y. Gunter (eds.) (1987), *Bergson and Modern Thought: Towards a Unified Science*. Harwood Academic Publishers.
- 6) デイヴィッド・クレブス氏 (社会情報システム論、2016 年登壇) 主催により、デジタル技術と時間経験をテーマとしたシンポジウム (英国、Salford 大学) が 2018 年 6 月に開催され、その論集が 2019 年に英国で Routledge から出版される予定である。注 27 参照。
- 7) Riggio, A. (2016), 'Lessons for the relationship of philosophy and science from the legacy of Henri Bergson', *Social Epistemology*, Vol. 30, No. 2, p.215. 以下のように続けられている。「[ベルクソンは] 使い古されたステレオタイプや実在についての時代遅れの共通理解から決別した革新的な議論と概念を構築し、同時代の科学的発見

についてのディテールとニュアンスに富んだ注意深い理解を、哲学的な仕方でも分節化したのである」(ibid.)。

- 8) 『思考と動き』(原章二訳、平凡社ライブラリー) 2013 年、9 頁。以下、同書には仏語原典の頁数が添えられているため、以降は PM の略記号に仏語原典の頁数を示し、訳書の頁数表記は省略する。
- 9) 具体的にはドイツ観念論である。スピノザについては、別な理解を示している。ベルクソンによれば、ある哲学者をその哲学者たらしめているのは、その非人称的な演繹に還元されないとこにおいてである。ベルクソンは、まさにスピノザを例に挙げて、「実体・属性・様態と呼ばれる大がかりなもの、入り組んだ定義、系、注をそなえた定理のおそるべき道具立て一式」と対照的な、彼の哲学の有するもう一つの側面（それは歴史的人物としてのスピノザのことでもない——それをベルクソンがどう描写しているかはテキストにあたられたい）こそが、スピノザを（逆説的にも）時代を超えた哲学者たらしめているのだと言う (PM, 124)。
- 10) 「物質と心は共通の側面を持っている。なぜなら、物質のある種の表面的な振動は、心の表面では感覚となって現れるからだ。[...] 心の表面近傍で成功する方法を、心の深部にまで応用しようという誘惑は大きい。その誘惑に身をまかせ、物体の物理学を転写する形で心の物理学を作るのはまったくもって簡単である。[...] そのような拡大適用が可能であるためには、知性の枠組みを精度を欠く状態 (état d'imprécision) にする必要があることがどうして分からないのだろう」(強調引用者、PM, 39-40)。この点については、平井論文に付した「伊佐敷氏コラムへの返答」(247 頁)も参照。
- 11) もちろん初めに厳格な形で方法を定義し、禁欲的にそれに準拠するようなタイプの知的誠実さがあることを、われわれはよく知っている。そしてそのような哲学によってしか得られない洞察があるだろうことも。
- 12) 村上論文が引用するように、ベルクソン自身はコロエやターナーの風景画を取り上げている。セザンヌとベルクソンについては以下の研究がある。Chao-Liang Calvin Yu (2017), *Cézanne and Bergson : Bergsonism in Cézanne's Late Works*, EHG Books.
- 13) 『精神のエネルギー』(原章二訳、平凡社ライブラリー) 2012 年。注 8 に述べた PM 同様、同書には仏語原典の頁数が添えられているため、以降は ES の略記号に仏語原典の頁数のみを示す。
- 14) 夏目漱石の言うとおり、ベルクソンの文章はたしかに「美しい」。簡潔にして端正な筆致はいかにも名文で、単語の選びからキアスムなどの作文作法、節構成、段落意識にいたるまで、エレガントで抑制の効いた文体は、辿るだけでよければ、これほど心地良いものはない。だが、ひとたび内容の整合的理解に踏み込もうとすると、印象は一転するのだ。
- 15) ベルクソン『意識に直接与えられたものについての試論』(合田正人・平井靖史訳) ちくま学芸文庫、2002 年に所収の、平井による「解説」を参照。
- 16) 知的創造性が、後付けではなく再認と想起そのものの基礎的な仕組みのなかに初めから組み込まれていなければならない点については、注 24 に挙げた平井論文を参照。
- 17) ひょっとすると解釈がこのゆらぎ状態に留まっていることに意味がある可能性もある。

- 18) 「知覚が空間を処理する範囲は、行動が時間を処理する範囲に正確に呼応している」(MM, 29)。
- 19) 奇しくもミケル氏は、石井氏が亡くなる際に、在外研究受け入れ先となっていた人物である。
- 20) 『物質と記憶』テキストでは、外的知覚の感覚質については主に第四章、内部感覚については第一章に記述が散在しており、上記の説明はそれを総合した平井の解釈に基づいていることを断っておく。詳細については、平井靖史「「スケールに固有」なものとしての時間経験と心の諸問題——ベルクソン〈意識の遅延テーゼ〉から」、森田邦久(編)『現在という謎』、勁草書房より 2019 年刊行予定。
- 21) Burns, Th. F., Benureau, F. C. Y. B, Tani, J., 'A Bergson-Inspired Adaptive Time Constant for the Multiple Timescales Recurrent Neural Network Model', JNNS, 2018.10.26.
- 22) 三宅陽一郎氏は、スクウェア・エニックス社の世界的な RPG ゲーム『ファイナル・ファンタジー XV』のゲーム AI の設計者として有名である。最近の業績として、'Current Status of Applying Artificial Intelligence in Digital Games', in Nakatsu, R., Rauterberg, M., Ciancarini, P. (eds.) (2017) *Handbook of Digital Games and Entertainment Technologies*, Springer, pp. 253-292.
- 23) 「〈意識の遅延テーゼ〉の行為論的射程——神経科学と人工知能研究による「拡張ベルクソン主義」アプローチ」、応用哲学会 第 9 回年次研究大会ワークショップ、福山平成大学、2017 年 4 月 22 日。
- 24) 三宅陽一郎「人工知能・哲学・生理学の中心的課題としての意識」、太田宏之「行動の原因を探究する科学の歴史」、平井靖史「心と記憶力——知的創造のベルクソンモデル——」、『人工知能 特集 意識とメタ過程』33 巻 4 号、2018 年 7 月。なお、太田氏と平井の論文は 2018 年 10 月現在ウェブサイト「AI 書庫」から登録なしで読めるようになっている。
- 25) 日本語では中澤栄輔氏による博士論文が貴重な研究である。中澤栄輔(2013)「記憶と因果：哲学的ならびに経験的検討」(博士論文、東京大学 甲第 28812 号)。
- 26) AB 理論とベルクソンについての論文も、近年ようやく目にするようになった。Sonja Deppe, 'The Mind-Dependence of the Relational Structure of Time (or: What Henri Bergson Would Say to B-theorists)' *Kriterion—Journal of Philosophy*, 2016, 30 (2): 107-124.
- 27) 永野の論考とはやや別な角度から、形式存在論を援用し、プロセスとイベントの二元論としてベルクソンを論じた平井の論考は以下。Hirai, Y. (2019) 'Event and Mind: An Expanded Bergsonian Perspective' in Kreps, D. (ed.) *Understanding Digital Events: Bergson, Whitehead, and the Experience of the Digital*, Routledge.
- 28) 本論集所収の平井論文末尾に付した「伊佐敷氏の質問への返答」247 頁を参照。
- 29) J. Canales (2016), *The Physicist and the Philosopher : Einstein, Bergson, and the Debate That Changed Our Understanding of Time*, Princeton University Press.

- 30) Bouton, Ch. (2017), “Chapter 6 : Is the Future already Present? The Special Theory of Relativity and the Block Universe View”, in Bouton, Ch. and Huneman, Ph. (eds.) *Time of Nature and the Nature of Time*, Springer.
- 31) De Broglie, ‘The Concepts of Contemporary Physics and Bergson’s Ideas on Time and Motion’, reprinted in P. A. Y. Gunter (ed. tr.) *Bergson and The Evolution of Physics*, The University of Tennessee Press, 1969 (originally in De Broglie, *Physique et microphysique*, 1947).
- 32) Yamashita Y, Tani J (2012) Spontaneous Prediction Error Generation in Schizophrenia. PLoS ONE 7 (5) : e37843. <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0037843>
- 33) 兼本浩祐氏は、『心はどこまで脳なのだろうか』（医学書院、2011年）において、エーの抱えた難点を現象学と精神病理学の原理的な不和に見いだしているが、この点は、「現象学をベルクソン化する」ことでこれに対処した本書の村上論文の観点から見て実に興味深い。
- 34) 以下を参考にした。郡司良夫（2013）「わが国におけるベルクソン受容史についての試論——文献目録を手掛かりとして——」『松山大学論集』第25巻第5号、69-161頁。
- 35) 日仏哲学会提案型ワークショップ「拡張ベルクソン主義は何をなしえたか・なしうるか——PBJ 2015-2017『物質と記憶』の総括と展望」（南山大学 名古屋キャンパス R棟 56教室）2018年3月23日。



第 1 部 持続と生

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

1-1 『物質と記憶』における生

フレデリック・ヴォルムス（天野恵美理訳）

今回の短い論文の目的はとてもシンプルであって、はじめに次のように定式化できる。

我々は以下のことを示そうと思う。まず、生が『物質と記憶』の枢要な問題であること。そして、生の問題には、この問題を論じたより有名な著作——『物質と記憶』に続くベルクソンの仕事（これはもちろん、11 年後に書かれる『創造的進化』のことである）——においてなされるのとまったく同じ仕方で解答が与えられるわけではないが、しかしながら、この問題は実際『物質と記憶』から次著『創造的進化』へと〔ベルクソンを〕導いていくものであること。最後に、『物質と記憶』が生の問題にもたらす一定の解決は、今日、我々が「生」のあるいは「生物」の「時代＝契機」（moment）と呼ぶものの核心において、より正確には、我々が「批判的生気論」の名の下に主張する哲学的理説の核心においてすら、この問題、我々の問題を理解するために肝要であるということである。

では、今日の批判的生気論の、より明白な幾つかの出発点のうちひとつを示すことから始めよう。『物質と記憶』が何よりもまず第一に主張した説明しているように思われるのは、実際、生気論ないし生の哲学一般のより決定的＝批判的（critical）な部分なのである。よく知られているように、『物質と記憶』における生ないし「実践的生」（「行動 action」という、より日常的な語によって表されることも非常に多い）は、我々がたいていの場合、純粋な実在、実在そのものへとアクセスできないことの理由である。生は、我々を実在や実在的時間、持続から遠ざけ、我々を空間や人為的な知覚、実践的な認識に押し込めたままにする、フィルターである。それゆえ、ベルクソンが『物質と記憶』のために、それも『創造的進化』刊行後に書いた回顧的な序文において、二種類の知すなわち心理学的な知と形而上学的な知とのあいだの

有名な対立において、彼がなおこの点を強調しているということは驚くにあたらない。

心理学は実践に役立つかぎりでの人間精神の研究を目的とするものであり、形而上学は有益な行動の諸条件を乗り越えようと努力するこの同じ人間精神にほかならない¹⁾。

『物質と記憶』のベルクソンによれば、そうしたものが生の批判的な力であり、生を批判することの重要性である。

この批判的な側面こそが、この本の出版当時にもっとも知られていたものなのであり、この同じ側面こそが、いくつかの主要な哲学に、それらのなす生の批判において深い影響をおよぼしたのであって、なかでもとりわけ、良くも悪くも（主として後者だが）ハイデガーの哲学に対して影響を及ぼしたのである！ ハイデガーが『存在と時間』の冒頭で、「行動」を通じての「存在」の歪曲および我々の「欲求」に応えるものとみなされた「対象」への「存在」の還元を批判するとき、彼は『物質と記憶』においてベルクソンがなした生への批判的アプローチを文字通り繰り返している。とはいえ、ベルクソンにとってはこのことは（いわゆる大文字の「存在」へと）生を乗り越えていくための理由ではなく、生の批判的な部分を越えて生のもう一つ別の側面へと向かうための理由であるという相違はあるが。我々はこの生批判のまた別の帰結を、現代哲学の生に対する「構築主義的」傾向において、例えばフーコーにおいて見ることができるだろう。フーコーいわく、生とはむしろ直接的には到達されえないものであり、それどころか逆に生とは、そこから生じてきた技術や歴史とともに、我々がそれを通して実在を見るフィルターのひとつなのである！

ベルクソンは、ハイデガーとフーコーよりもずっと以前に、そのことを理解し著述していた。彼の生氣論は、そのようなものがあるとして、他のいかなる生氣論よりも批判的なのである。

しかしそれは〔批判的であるとしても〕それでもなお、あるもっともな理由ゆえに、ひとつの生氣論に留まるのである。そしてこの理由とは、『物質と記憶』においてすら（つまり「エラン・ヴィタル」より以前にあってすら）、ベルクソンの哲学においては生の別の面があるということであり、つまり、生氣論

最後の言葉——夢のような、まだ夢のような
あとがきに代えて

本書成立の経緯、前二著との関係¹⁾、PBJ 全体との連関、本書の各部各章の内容に関しては、すべて平井の序論に尽くされている。付け加えることがあるとすれば、まずは本書（とその母胎となったシンポジウム）周辺で生じた事象を報告することである。『解剖』（2016 年）と『診断』（2017 年）の間に生じた関連諸事については『診断』の「後書き及び謝辞」に記したので、ここでは『診断』と本書『再起動』（2018 年）の間に生じた関連諸事を、序論で既出のものも含めて、おおよそ時系列順に列記しておく。①京都大学の青山拓央氏と立教大学の國領佳樹氏という気鋭の研究者たちによって熱のこもった『診断』の書評が執筆されたことは、感謝とともに特記しておきたい²⁾。國領氏はメルロ＝ポンティの、青山氏は時間の哲学の専門家であり、領域横断的な探求を標榜する私たちの「拡張ベルクソン主義」にとって、願ってもない評者である。②共編者が記すのは例外的かもしれないが、シンポジウムの立案・実施、本論集完成に至るまでの緻密かつ膨大な仕事をこなしながら、これと同時並行的に進められた平井の研究の量と質には驚かされる³⁾。③日仏哲学会 2018 年春大会の前日ワークショップにて、第三期 PBJ の総括を行った⁴⁾。④ご登壇いただいた科学者の方々がご自身のフィールドで新たな仕方でベルクソンを活用したお仕事を発表されており、そのことを通じて、文字通り「拡張ベルクソン主義」が体現されている⁵⁾。

＊

次になすべき喜ばしい務め、それは本書（とその母胎となったシンポジウム）成立に寄与してくださった方々に謝辞を述べることである。120 余年前に出版された一冊の書物のために、6 名の科研費メンバー⁶⁾に加えて 13 名の登壇者⁷⁾、6 名の特定質問者⁸⁾、2 名の通訳⁹⁾に 6 名の翻訳者¹⁰⁾、3 名の若手発表者¹¹⁾の皆様に集結いただき、心と時間、脳と記憶に関するベルクソン

的なアプローチをめぐって討議しえたこと自体、振り返れば何か奇跡的なことだったと思わずにはいられない。夢のような、まだ夢のような。深甚の感謝の意を捧げたい。

いつも素敵なカバー原画というプレゼントをしてくださる伴野亜希子さん¹²⁾、また本書の索引作成という繊細かつ根気のいる作業を引き受けてくださった学生諸氏¹³⁾にも感謝したい。そして最後に (last but not least!)、書肆心水の清藤洋氏には、『解剖』『診断』に続き、今回もまた、細やかなご配慮と忍耐強いご助力を賜った。篤く感謝申し上げる次第である。

＊

最後に発するべき言葉 (le dernier mot) は何だろうか。

PBJ は Project Bergson in Japan の略称だが、もちろん *from Japan* の意も込められている。『物質と記憶』シリーズを締め括り、同時に PBJ の活動にひとまずの結び目を施すにあたって、最後にこのプロジェクトのことをもう一度強調しておきたい。

一度踏破された道のりは計測可能・予見可能に見え、要するに踏破可能に見える。だが、私たちの歩んできた道のりは決して平坦なものではなかった。国内で感じ続けた抵抗感、国外で感じ続けた疎外感は、経験した者にしか分からない。感傷に浸ろうというのではない。その抵抗、その疎外を生み出した構造的な諸要因は、今なお姿形を変えて厳然と存在していると言いたいのである。

2007 年に PBJ を始動させた当初、私たちの念頭にあったのは、欧米の西洋哲学研究の最新の学説を日本に紹介する従来の輸入業スタイルに満足せず、日本の西洋哲学研究を世界に向けて積極的に発信し、それによって世界の西洋哲学研究を拓くということであった。世界に開き、世界を拓く。平井はこの動きをさらに加速させた。哲学を科学に開き、科学を哲学に開くことで、哲学と科学を拓く。外国人研究者たち、認知科学の研究者やエンジニアたちと対等に渡り合うなどという発想は、事によると、時代がかって見えるかもしれない。だが、最先端の思考を輸入し現在脚光を浴びている者たちの仕事は、要するに国際的に、そして科学・工学の世界にどのくらい知られ、国際協働や科学・工学との接続にどれほど寄与しているのか。むろん、この言葉は即座に自分自身に厳しく跳ね返ってくる。私たちの活動は、狭義の「業界」を超えて、一体どれほどの学問的承認や社会的認知を国内外において得られた

というのか。PBJ の運動体を構想してから十数年の齢を重ねた私たちにとって、答えは決して楽観視を許さない。だが、そのような自身への厳しい問いかけなしに、さらに前に進むことはできないだろうとも思う。

文科省の科学研究費¹⁴⁾を財源とした研究チームでの『物質と記憶』の総合的研究は、本書を含む三冊の論集刊行で、コラムを含めると延べ 50 本を優に超える論考を成果として生み出した計算になる。単に異分野から諸部分を貼り合わせたような小手先の混合物に堕することなく、また確定済みの正統的解釈の一方的な「応用」でもなく、テキストの掘り下げの深さと具体的実装の射程の高さとが相互に迫りかけ合うような議論 (cf. MM, 115) を実現できたのではないかと自負している。この点についてはシンポ最終日にヴォルムスも興味深いコメントを残していた。これはフランスでは為しえなかった試みだ、と。言語的地政学、国民性・精神性、制度、歴史、さまざまな事情、複雑な諸要因が絡み合っているのであろう。それゆえにこそ、この日本でプロジェクトを始動させたことには積極的な意味があるのだとあらためて思うと同時に、しかし、堅忍不拔の心をもって国際協働を続け、英・仏・独語での発信や対話を続けていかなければならないとも思う¹⁵⁾。私たちはまだこの『物質と記憶』研究シリーズ三冊分の豊饒な学問的成果を国際的に発信していない。これは残された課題である。

今後 PBJ がどう進んでいくか。いろいろな可能性が垣間見えた気がする。もちろんすべてが実現するほど甘くはないだろう。しかしまずはこのようなプロジェクトが可能であること、そして実際にこの極東の地で三年間は実現したこと、これは継続すべきものであると挑戦の意義を体感し共有できたことは、成果と言えるのかもしれない、と思う。

だが、依然としてベルクソンのアイデアは、哲学の他分野でさえそうだが、近隣諸分野ではほとんど知られてもいない。今回私たちは『物質と記憶』に関して初めて本格的に近隣諸分野との接合を試みたが、第一主著である『意識に直接与えられたものについての試論』に関しても、第三主著である『創造的進化』に関しても、第四主著である『道徳と宗教の二源泉』に関しても、現代科学や現代哲学との同様の接続ないし対決が、具体的な諸事象の検討を通して、今まで以上の解像度をもって行なわれねばならない。むしろここからが本当の勝負である。それも、ますます複雑化の一途をたどっている、私たち日本の哲学者・哲学研究者を取り巻く社会情勢、とりわけ大学を取り巻

く社会情勢のただなかで¹⁶⁾。だからこそ、哲学者・科学者・エンジニアたちとの国内外における協働のみならず、こういったトピックにご関心を向けてくださる一般読者の方々との“協働”が大切になってくる。本書を手にとってくださった方々に今後ともご理解・ご声援を向けていただけるよう、よりいっそう精進していきたい。伴野さんによるカバー絵が見事に表現しているように、「再起動」はまだ長い道の途中である。

フランス語に *ne pas avoir dit son dernier mot* という表現がある。直訳すれば、「最後の言葉を言わなかった」となるのだが、「まだ持てる力を出し切っていない、諦めてはいない」という意味になる。最後の言葉として私たちは、夢のような、まだ夢のような地平に到達するために「まだ最後の言葉を言っていない」と言っておくことにしよう。十年後、私たちはこの「最後の言葉」をどう振り返ることができるだろうか。その時の自分に今、ボールを投げる。

2018 年 11 月

藤田尚志・安孫子信

注

- 1) 平井・藤田・安孫子編『ベルクソン『物質と記憶』を解剖する——現代知覚理論・時間論・心の哲学との接続』（書肆心水、2016年）と『ベルクソン『物質と記憶』を診断する——時間経験の哲学・意識の科学・美学・倫理学への展開』（書肆心水、2017年）。以下それぞれ『解剖』『診断』と略記する。PBJのウェブサイトは以下。<http://matterandmemory.jimdo.com>
- 2) 青山氏による書評は『週刊読書人』2018年1月27日号に、國領氏による書評は日仏哲学会編『フランス哲学・思想研究』第23号（2018年9月、359-363頁）に掲載された。どちらもネット上で読める。先行する『解剖』の書評（小関彩子氏、村松正隆氏による）も含め、すべてPBJウェブサイト（注1）にリンクがある。
- 3) ①2018年2月16日、谷淳氏（2017年『再起動』シンポ登壇）の所属する沖縄科学技術大学院大学（OIST）認知脳ロボティクス研究ユニットにてセミナーを開催し、人工知能ロボティクスの研究者・院生向けに、ベルクソンの可変マルチ時間スケールのアイデアについて講演（“How Time Makes Mind: An Expanded Bergsonian Framework for Consciousness Research”）。②2018年6月14日、デイヴィッド・クレプス（社会情報システム論、2016年『診断』シンポ登壇）主催の、デジタル技術と時間経験をテーマとした国際シンポジウム Colloquium on Understanding Digital Events（英国、サルフォード大学）にて、拡張ベルクソン主義に基づいた発表を行い、技術と人間経験の未来について報告（“Event and Mind: An Expanded Bergsonian Perspective”）、2019年 Routledge から刊行予定の論集に所収。③人工知能学会の学会誌『人工知能』2018年8月号の特集「意識とメタ過程」に、三宅陽一郎（ゲーム人工知能、2017年『再起動』登壇）、太田宏之（神経科学、2016年『診断』登壇）と共に行った2016年応用哲学会でのワークショップ「〈意識の遅延テーゼ〉の行為論的射程——神経科学と人工知能研究による「拡張ベルクソン主義」アプローチ」に基づく論考を掲載し（詳細は本論集の序論を参照）、人工知能にかかわる研究者に拡張ベルクソン主義の理念を紹介。④2019年刊行予定の物理学者と哲学者の対話による時間論集、森田邦久（編）『現在という謎』（勁草書房）に「スケールに固有」なものとしての時間経験と心の諸問題——ベルクソン〈意識の遅延テーゼ〉から」所収。
- 4) 2018年3月23日に南山大学において開催された「拡張ベルクソン主義は何をなしえたか・なしうるか——PBJ 2015-2017『物質と記憶』の総括と展望」では、安孫子が司会を、杉村靖彦（京都大学）、三宅岳史（香川大学）、岡嶋隆佑（慶應義塾大学）、米田翼（大阪大学）の諸氏が提題者を、平井が応答者を務めた。
- 5) ①2018年10月開催の日本神経回路学会（JNNS）において、沖縄科学技術大学院大学（OIST）のThomas Burns氏、Fabien C. Y. Benureau氏、谷淳氏が拡張ベルクソン主義のアイデアを盛り込んだモデルを発表（Paper-ID:84 A Bergson-Inspired Adaptive Time Constant for the Multiple Timescales Recurrent Neural Network Model）。②2018年10月、愛知医科大学医学部の兼本浩祐氏（精神医学、2016年登壇）が『なぜ私は一続きの私であるのか——ベルクソン・ドゥルーズ・精神病理』を刊行（講

談社選書メチエ)。脳と心を扱われた前二著(『心はどこまで脳なのだろうか』『脳を通して私が生まれるとき』)の発展版として、PBJでの協働研究の成果を取り入れた内容となっている。「拡張ベルクソン主義」の精神医学分野への展開である。

- 6) 平井を代表とし、安孫子・藤田に加え、合田正人・杉村靖彦・檜垣立哉という現在フランス哲学研究において望みうる理想的なメンバーに支えられている。
- 7) 本論集の論文執筆者。
- 8) 本論集のコラム執筆者。残念ながら我々のスケジューリングのミスによって北海道大学の村松正隆氏には特定質問をお引き受けいただきながら、コラムをご執筆いただくことがかなわなかった。記してお詫び申し上げる。
- 9) 石渡崇文氏(東京大学)、清水将吾氏(日本大学)。
- 10) 天野恵美理(大阪大学)、木山裕登(トウールーズ大学)、山内翔太(京都大学)、米田翼(大阪大学)、山根秀介(舞鶴高専)、石渡崇文(東京大学)の各氏。なお、『再起動』では直接翻訳に参加していないが、岡嶋隆佑氏(慶應義塾大学)には、翻訳チームの統括として運営面でご助力をいただいた。記して感謝します。
- 11) 原健一氏(北海道大学)、田村康貴氏(東北大学)、吉野育志氏(京都大学)。
- 12) 株式会社メダマラボ・システムズ。元になったシンポジウムのポスターも、彼女の手になるものである。PBJウェブサイト(注1)の「2015-2017 Posters」メニューから閲覧・ダウンロード出来る。旧知の仲とは言え、平井の細かな注文に、辛抱強く、しかしいつも予想を上回る素敵な作品で応えてくれたことに、改めて感謝します。
- 13) 立津一樹(九州産業大学)、岩田弓佳(福岡大学)、田中俊太朗(福岡大学)、岩永育美(福岡大学)、宮内孝啓(九州大学)の各氏。
- 14) 平成27-29年度科学研究費補助金・基盤研究(B)「ベルクソン『物質と記憶』の総合的研究——国際協働を型とする西洋哲学研究の確立」(課題番号:15H03154)
- 15) ほんの一例に過ぎないが、直近の2018年11月19・20日にも、パリ・ナンテール大学で開催された国際シンポジウム「日本哲学への誘い」において、Thierry Hoquet, Michel Dalissier, Eddy Dufourmont, Elie During, 黒田昭信, 永井晋らとともに、本研究チームの安孫子・合田が関連する発表を行なったばかりである。
- 16) 『解剖』巻頭の「はじめに」にも記したが(7頁)、「場」の意識、「制度」への眼差しを忘れてはならない。「哲学と大学」プロジェクトは決してPBJの着想と無縁ではない。藤本夕衣・古川雄詞・渡邊浩一編『反「大学改革」論——若手からの問題提起』(ナカニシヤ出版、2017年)所収の藤田論文「パフォーマティヴの脱構築——デリダの『哲学への権利』における哲学的大学論」(57-80頁)を参照のこと。

人名索引

カナ表記ブレは代表的なものにまとめた。欧文でのみ記されたものは「欧文」の項を参照のこと。

あ

アーカミ・ハメド, ニマ 220
アインシュタイン 27, 162, 190, 194, 202, 219
青山拓央 395, 399
アダマール 177
安孫子信 11, 15, 16, 30, 34, 137, 184, 251, 313, 398, 400
天野恵美理 40, 68, 400
アリストテレス 52, 53, 57, 236, 237, 334, 369
アルヴァックス 30, 275, 276, 287, 307-309
伊佐敷隆弘 15, 25, 30, 35, 36, 222, 247, 248, 254, 257
石井敏夫 21, 36
石渡崇文 104, 400
井筒俊彦 153, 163
いとうせいこう 158, 173
伊東俊彦 29, 31, 304
井ノ口馨 285
岩田弓佳 400
岩永有美 400

ヴァレラ, F. J. 105, 119, 387
ヴァン・デア・コーク, ベッセル 270, 282, 284
ウィーナー, N. 182
ウィスコット 143, 144
上田泰治 285
ヴォルムス, F. 29, 40, 49, 275, 327, 333, 337, 348, 357-359, 361, 362, 388, 394, 397
内海健 28, 152, 153, 166, 173
宇野文夫 362
ヴェント 286

エー, H. 29, 185
エーデルマン 14, 185
エビクロス 221, 373

エルマン 106

オイラー 196
大川宣昭 285
太田宏之 17, 22, 24, 36, 181, 188, 399
岡嶋隆佑 22, 399, 400
岡谷貴之 383
岡部聡夫 138
小関彩子 399
オッペンハイム 366

か

カヴァイエス 182
ガザニガ 14
梶本尚敏 219
カーネーレス, J. 27, 36, 219
カーネマン 145
兼本浩祐 14, 15, 17, 22, 28, 37, 184, 185, 399
ガリレオ 53
ガル 57
河本英夫 184
カンギレム, G. 29, 46, 47, 180, 329
カント 12, 15, 26, 52, 320, 342

ギブソン 16, 146, 173, 185
木山裕登 189, 400
キャンベル, スー 267, 281
紀里谷和明 173
金瑛 287

クザーヌス 298
グッデイル 145
國吉康夫 142, 156, 173
熊野純彦 138, 284
クラーク 221
グランジェ, G. G. 182
クリック 14
クルノー 177
クレイン 222
クレプス, デイヴィッド 15, 34, 36, 399

黒田昭信 400
 グロタンディーク 163
 クワイン 383
 郡司ベギオ幸夫 15, 21, 183
 郡司良夫 31, 37

ケッチャム, K. 283
 ケブラー 53
 ケリー, M. R. 15, 25

合田正人 15, 31, 34, 35, 94, 286, 302, 309, 313, 382, 383, 394, 400
 河野伊三郎 383
 河野哲也 15, 16, 173, 182, 185
 國領佳樹 395, 399
 コースガード, C. 15
 コッホ 14
 小林秀雄 32
 コールマン, ユリウス 338
 コロー 35, 92
 コンウェイ 305, 313
 コント 15, 16, 54-59, 62, 64, 67, 182

さ

サイモンズ, P. 363, 366, 382-385, 388
 サットン, J. 166, 173, 252, 253, 270
 サール, J. 208, 222
 サルトル 315-317
 サン＝ブナン 177

ジェイムズ, W. 50, 108, 116, 185, 222, 290
 シーガー 208
 清水将吾 400
 シモンドン 12, 15, 20, 182, 185, 274, 314-338, 379, 381, 386, 387, 391
 ジャクソン, J. H. 120, 185
 ジャンケレヴィッチ, V. 29, 47, 98, 101
 シュバリエ, J. 101
 シュレーディンガー 191, 192
 ショーペンハウアー 180
 シルバーシュタイン 189, 190, 204

杉村靖彦 15, 31, 32, 34, 289, 309-311, 399, 400
 杉山直樹 18, 31, 34, 252, 394
 鈴木章円 285
 スタッケイ 189, 190, 204
 スタンジェール, I. 272, 273, 286
 ストローソン, G. 208
 スピノザ 35, 52, 63, 64, 180, 237, 364, 3

79, 381, 384, 391, 392, 394
 スペンサー 52, 54, 182, 185, 335, 336

セザンヌ 19, 35
 ゼノン 269, 284, 384

ソクラテス 165

た

高橋里美 32
 ダグラス, メアリー 276
 竹内信夫 31
 立津一樹 400
 ターナー 35, 92
 田中俊太朗 400
 田辺元 31, 85, 295, 297, 302
 谷淳 14, 17, 23, 24, 28, 36, 37, 119, 139, 173, 175, 177, 179, 185, 399
 谷口薫 25, 386
 田村康貴 400
 ダリシエ, ミシエル 31, 400

チャベック, M. 191
 チャーマーズ, D. 120, 222
 チャン, T. 220

土谷尚嗣 163

ディラック 201, 202
 デイントン, B. 13, 15, 24, 25, 27, 29, 30, 138, 145, 189, 238, 257, 259-263, 393
 デカルト 12, 14, 52, 58-60, 63, 67, 120, 155, 206, 229, 237
 デュエム, P. 183
 デューリング, E. 14, 15, 25, 27, 189, 219, 400
 デュルケム 287

ドゥアンヌ 14
 ドゥルーズ, G. 12, 22, 68, 98, 183, 302, 362, 384, 388, 394
 トノーニ, G. 14
 ド・ブロイ 27, 37, 191, 193
 トムソン 26, 380
 ドリーシュ, H. 178, 181
 ドルボー, J. 15, 25

な

中敬夫 361
 仲真紀子 283

永井晋 400
永井均 152
中澤栄輔 36, 170, 174, 251, 254
永野拓也 15, 25, 36, 182, 272, 363, 386,
388, 389, 391
夏目漱石 31, 32, 35

西田幾多郎 15, 31, 289-293, 295-303, 31
0, 311, 313
ニーチェ 58, 180
ニュートン 197, 200, 201, 205, 212, 221

ノエ, A. 16
野本真順 285
ノルトフ 14

は

ハイジック, J. W. 293, 302
ハイゼンベルク 201
ハイデガー 41, 82, 105, 110, 168
バシュアール, G. 18
パース, C. S. 369, 370
パスカル 298
パストゥール 63
ハッキング, I. 383
パトナム, H. 222
原健一 400
原章二 8, 35, 94, 219, 283
バルト 163
パルメニデス 190
伴野亜希子 396, 398

檜垣立哉 15, 16, 29, 173, 224, 251, 400
樋口勝彦 385
ピッツ, W. 181, 186
平井靖史 15, 22-25, 28-30, 35, 36, 94, 10
5, 117, 120, 136-139, 173, 175, 176, 17
9, 184, 185, 224, 251, 257, 258, 262, 26
3, 313, 382, 389, 394, 395, 399, 400
平林康之 382
平光哲朗 22, 25, 26, 386-388, 393
ピラン 390
廣瀬浩司 337
広田すみれ 383

ファイグル, H. 222
ファインマン, R. 197, 220
ファラデー, M. 26
フェヒナー, G. T. 369, 370
フェルマー 196, 198
福居純 19

フーコー 41
藤田尚志 11-13, 15, 34, 137, 184, 219, 25
1, 313, 398-400
ブシネスク 177
伏見康治 286
伏見譲 286
藤本タ衣 400
ブチ, ジャン＝リュック 14, 15
フックス, T. 281, 284
フツサール, E. 81-84, 90, 92, 95, 98, 105,
110, 147, 291, 292

ブッダ 302
ブトルー, E. 182
ブラウン, S. D. 15, 30, 31, 246, 266, 304
-308
ブラトン 13, 17, 52, 78, 293, 295
ブランク 198
ブランシュヴィック, L. 182
フランソワ, A. 34
ブリゴジン, イリヤ, I. 182, 286
フリストン, カール 142, 164
古川雄嗣 400
ブルースト 77
ブルックス, ロドニー 147, 150, 186
プロ, ギュスタヴ 58-64
フロイト, S. 29, 47

ヘラクレイトス 190
ベル, J. S. 193
ベルタランフィ, L. 181
ベルネッカー, S. 170, 174, 251, 254
ベルンシュタイン 122, 137, 138
ベントレー 221

ボアンカレ 177, 183, 220, 370, 371, 383,
384
ホップズ 180, 206
ボドロガ, ユリア 15, 20, 25
ボーム 193
ボランニー, M. 182
ホルト, G. E. 185
ボルン 201
ホワイトヘッド 26, 285, 286, 367, 377, 3
78, 380-382, 385

ま

マカロック, W. 181, 186
マクスウェル 177, 202, 206
マクタガート 25
マクデヴィット 189, 190, 204
増田靖彦 22, 97

松井久 94, 286
 松枝秀明 287
 松沢哲郎 148, 173
 松本力 383
 松吉大輔 283
 マトゥラーナ 387
 マラーキー, J. 34
 マラルド, J. C. 302

ミケル, ボール＝アントワヌ 14, 15, 21, 2
 2, 29, 36, 68, 97, 98, 100, 189, 190, 219
 ミドルトン, D. 276, 308, 313
 宮内孝啓 400
 三宅岳史 13, 15, 24, 175, 399
 三宅陽一郎 15, 22-24, 28, 36, 120, 134, 1
 37-139, 175, 176, 179, 180, 184, 185, 1
 88, 399
 ミラヴェット, S. 14, 15
 ミリカン 16, 148, 173
 ミンコフスキー, E. 29, 47

村至上考 285
 村上靖彦 15, 20, 22, 35, 37, 81, 94, 99, 1
 00, 138, 161, 173, 276
 村松正隆 399, 400
 村山達也 15, 21, 394

メイエルソン 185
 メイヤスー, Q. 348, 362
 メルロ＝ポンティ 105, 106

モーベルテュイ 196, 220
 森田邦久 36, 251, 399
 森元良太 383

や

山内翔太 266, 400
 山鳥重 173
 山根秀介 314, 400
 山野井泰史 356, 362
 ヤン＝ミルズ 202

湯川秀樹 202
 ユクスキュル 16, 123, 137, 146, 320

吉田正俊 145

吉野斉志 400
 米田翼 314, 399, 400
 ヨルダン 201

ら

ライプニッツ 14, 52, 63, 64, 205, 221, 29
 8, 369, 394
 ラヴェツソン 390, 391, 394
 ラグランジュ 197
 ラシュリエ 390, 391
 ラッセル, B. 24, 170, 174, 230, 233, 252,
 254
 ラ・フォンテーヌ 79
 ラメルハート, D. E. 187
 ラモニ＝カハール 176

リキエ, C. 12, 15, 34
 リクール 12, 15, 313
 リシェ, シャルル 370, 383
 リシール 96
 リーベイ 275, 279, 281
 リベット, B. 104, 112, 119, 155

ルクレティウス 315-318, 320, 321, 364, 3
 79, 381, 385, 391
 ルシエ, アルバン 356, 362
 ルソー 79
 ルフェーヴル 15, 20, 21, 25, 274, 314, 38
 6, 387, 391

レ・ペドヴィン 222, 223, 251

ロイス 292, 302
 ローゼンブラット 186
 ロック 206
 ロビンズ, スティーヴン・E 15, 16, 173, 1
 85
 ロフタス, E. 30, 246, 266, 270, 283, 304,
 313

わ

渡邊浩一 400
 ワトソン, J. B. 271, 285

欧 文

Ahmadi, A. 173
 Ashmore, M. S. D. 281, 283
 Baddeley, 283, 284
 Bardon, A. 223
 Benureau, F. C. Y. B. 36, 399
 Bouton, Ch. 37, 219, 251, 253
 Broad, C. D. 251, 254
 Burns, Th. 23, 36, 399
 Calender, C. 219
 Carr, H. W. 302
 Ciancarini, P. 36
 Clayton, P. 222
 Conway 274, 281, 313
 Craig, W. L. 219
 Craik, F. I. M. 251
 Davies, P. 222
 Debaise, D. 378, 384
 Deppe, S. 36
 Doyle, J. M. 283
 Dufourmont, E. 400
 Dyke, D. 223
 Dysert, J. 283
 Forzy, G. 34
 Freyd, J. 281
 Gallois, Ph. 34
 Graves, A. 173
 Gunter, Pete A. Y. 34, 37
 Hitch 283, 284
 Hoshino, Y. 119
 Huneman, Ph. 37
 Hwang, S-Y. 336

Ito, M. 119
 Johnson, M. K. 251, 254
 Leighton, R. B. 220
 Loveday 274, 281, 313
 MacMillan, K. 281, 283
 Michaelian, K. 251, 254
 Mitchell, K. J. 251, 254
 Morfino, V. 379, 384, 385
 Nakatsu, R. 36
 Noda, K. 119
 Norman, 284
 Ofshe, R. 282
 Papanicolaou, A. C. 34
 Pickrell, J. E. 282, 313
 Place, U. T. 222
 Rauterberg, M. 36,
 Regge, T. 221
 Riggio, A. 34
 Robins, S. K. 251, 253
 Ross, M. 313
 Rowlands, M. 235, 251
 Sands, M. 220
 Semon, R. 285
 Senior, Th. D. 252, 255
 Shallice 284
 Smith, Q. 219
 Stenner 275
 Tulving, E. 251
 Wayne, G. 173
 Williams, R. M. 221
 Wilson, A. 313
 Yamashita Y. 37, 119
 Yu, Chao-Liang C. 35

事項索引

カナ表記ブレは代表的なものにまとめた。

あ

遊び 169-171

アフオーダンス 12, 15, 146, 173, 185

ア・プリオリ 16, 17, 61, 62, 120, 125, 15
2, 154, 233, 320, 322, 328

ア・ポステリオリ 19, 59, 62

暗示 91, 99, 248, 249

『意識に直接与えられたものについての試論』
25, 26, 32, 35, 69, 94, 173, 174, 353, 36
2, 363, 365, 370, 371, 382-385, 389, 39
2, 394

意識の科学 13, 15

意思決定 14, 145, 150, 152, 163, 179

異質性(的) 20, 353, 365, 389

イスラム哲学 153

一元論 60, 98, 124, 208-210, 222, 247, 2
57, 259, 263, 289, 315, 332, 333, 386

一般観念 144, 146, 167

意図 107-113, 115-117, 141, 143, 146-14
8, 152, 155, 164, 165, 284, 392

イマージュ記憶 20, 29, 127, 128, 130, 13
2, 135, 140, 232-234, 236, 238, 240-24
2, 248, 249, 255, 257

意味記憶 240

意味論 167, 237, 274

渦 160, 167

宇宙論 318

運動図式 →「図式」も見よ 177, 318, 325,
373-377, 379, 389

運動的イマージュ (image motrice) 319-3
21, 331

映画の 287

永久(永遠)主義 190, 211, 214-216, 218,
219, 223, 259-262

extension →「伸張」「拡がり」「延長」も
見よ 339-348, 353, 357, 358, 360, 361,
386, 387

ex-tension 344, 349, 351-356, 358, 360,
362

エージェント・アーキテクチャ 127-130, 15
2

エナクティブ 284

エネルギー保存則 236

エピステモロジー →「科学認識論」を見よ

エラン・ヴィタル 41, 45, 177, 192, 333

延長 →「拡がり」「extension」も見よ 21,
22, 26, 27, 227, 287, 339-346, 353, 357,
358, 361, 387, 388, 393

延長主義 →「時間的延長」も見よ 27, 210,
211, 214-216, 222

エントロピー 141, 336

オカレント (occurrent) 25, 272, 363-3
68, 370-372, 374-378, 380, 381, 389

オーダーメイド 18, 20, 21, 245

オートポイエーシス 182, 184

か

回転 170, 375, 376

海馬 140, 166

回復記憶 266, 267, 283

解剖学 57, 59

カオス 112, 113, 141, 142, 144, 177, 178

化学 14, 55, 57, 384

科学認識論 (エピステモロジー) 21, 182, 1
83

確証バイアス 17, 160

拡張 17, 20, 22, 68-71, 85, 91, 92, 97, 99,
100, 105, 124, 127, 133-136, 144, 149,
167, 170, 172, 181, 189, 255, 265, 328,
374, 375

拡張ベルクソン主義 14, 15, 21-23, 36, 175,
181, 183, 189, 210, 301

確率論 104, 111, 112, 141, 142, 191, 192,
213, 369, 370, 372, 373

過去と現在の同時生成 →「現在と過去の同時
生成」を見よ

過去の不可侵性 231, 239, 248

家族的類似性 269

感覚-運動系 43, 104, 127, 147, 148, 157,
164, 238, 240, 255, 285, 287, 322, 372,

373, 378, 379
 感覚質 →「クオリア」も見よ 14, 18, 36, 138, 155, 156, 224, 225, 239, 247, 339, 342-349, 352, 353, 355, 358, 387, 388
 還元（主義） 56-58, 154, 207, 208
 環世界 123, 146, 159, 320
 カントールの座 269
 観念論 21, 76, 122, 145, 155, 295, 342

 機械学習 140
 機械論 133, 146, 178, 182, 183, 205, 206, 212-214, 221, 346, 347, 349
 偽記憶 115, 117
 記号主義 136
 機能主義 208
 逆円錐（図） 20, 21, 23, 25, 46, 132, 133, 147, 149, 150, 167, 225, 247, 253, 255, 291, 295
 逆ベイズ推論 →「ベイズ推論」も見よ 21, 183
 ギャップ 22, 23, 113, 155, 224-226, 245, 247
 共意識 215-218, 223
 共外延的 21, 22, 29, 75, 76, 78, 97, 100
 強化学習 167
 共感 91, 99
 共時的 →「同時間的」を見よ
 凝縮 →「収縮」「縮約」も見よ 15, 22, 124, 126, 129, 155, 170, 171, 224, 226, 239, 339, 348, 351, 355, 358, 389
 共述語 75
 共存 72, 73, 75, 78, 97, 98
 京都学派 12, 290
 虚偽記憶 266, 267, 276, 278, 283, 304, 309, 313
 緊張 19, 43, 44, 83, 182, 265, 275, 276, 339-341, 343-346, 348-353, 355, 356, 358-361, 387

 空 134, 135, 153
 空間化 26, 167, 273
 偶然 115, 171, 285, 286, 363, 364, 369, 373, 378, 379, 381, 386, 391-393
 クオリア →「感覚質」も見よ 120, 155, 209
 クロノロジー 338

 経験論（主義） 18, 58, 69, 97, 317, 318
 形式存在論 12, 15, 25, 36
 形而上学 →「実証的形而上学」も見よ 17, 18, 31, 40, 41, 43, 45, 47, 48, 50-52, 55, 56, 61, 64, 65, 69, 71-75, 78, 79, 88, 10

6, 178, 190, 197, 199, 204, 206, 208, 210-212, 217, 224, 245, 246, 253, 263, 268, 271, 287, 290, 294, 317, 328, 332-334, 341, 359, 360, 363, 369, 378, 384, 387, 393
 芸術 20, 90, 91
 形相因 236, 369
 形相的有 237, 248, 255
 華嚴哲学 153, 163
 ゲシュタルト 346, 347
 決定論 104, 111, 113, 141-143, 158, 177, 183, 192, 193, 212, 253, 391, 392
 幻覚 29
 言語哲学 195
 現在主義 21, 74, 167, 190, 210-212, 215-219, 222, 262
 顕在的 →「現働的」を見よ
 現在と過去の同時生成 243, 294
 現在の記憶 294
 減算的 29
 原子 26, 28, 364, 368, 370, 373, 378, 381
 現象学 12, 20, 81-87, 89-91, 93, 98-100, 105, 106, 108, 115, 231, 246, 275, 291, 292, 320
 現働的（化）・現実的（化） 21, 22, 68, 69, 71-78, 93, 97, 99, 100, 127, 175, 183, 232-234, 236, 240, 241, 243, 247-250, 254, 255, 257-259, 287, 294-296, 299, 336
 健忘症 166
 圏論 163

 工学 120, 131, 136, 154, 162, 164, 166, 167, 175-181, 183, 224, 245
 『攻殻機動隊』 158
 構成主義 226, 229, 230, 234, 247, 254
 構成論的アプローチ 104, 105, 108, 109, 150, 164
 構築主義 41
 行動主義 271, 285
 功利性（的） →「有用性（的）」を見よ
 心の哲学 12, 25, 121, 224, 227, 263
 個性化（individualisation） 329, 330, 332, 338
 個体化（individuation） 317, 318, 321, 326, 330-332, 336-338, 391
 骨相学 57, 59
 コナトゥス 180, 394
 コネクショニズム 136
 コペンハーゲン解釈 191-193
 固有受容感覚（proprioception） 107, 109, 111-114

痕跡 133, 166, 167, 225-227, 230, 252, 253, 270, 285
 コンティニューアント (continuant) 25, 272, 363-367, 370, 371, 374-378, 380, 381, 388, 389
 コンボリューショナル・ネットワーク 146, 178

さ

最小作用の原理 196, 197, 200, 203, 206, 214, 220
 再帰的 (型・リカレント) 23, 75, 76, 106-108, 117, 139, 141-143, 161, 165, 187
 再起動 13, 210, 386
 再認 20, 21, 29, 35, 108, 124, 233, 238, 246, 372, 373, 375, 379, 388, 390
 先取り 318, 319, 321, 322, 324, 325, 327, 328, 331, 335, 336
 作話 309
 サビア＝ウオーフ仮説 195
 サブサンクション・アーキテクチャー 150, 186
 散逸 (系・構造) 167, 168, 182
 三段階の法則 54, 55, 58, 59, 62, 182
 死 47, 84-87, 168, 169, 172, 291, 299, 303, 356
 自我 77, 130, 150, 152, 160, 353, 359
 自覚 289, 291-297, 299, 300, 303, 310
 弛緩 19, 77, 83, 182, 341, 347, 350, 353, 362
 時間経験 12, 15, 24, 27, 34, 36, 47, 74, 83-85, 99, 137, 209, 211, 222, 251, 263,
 時間スケール →「マルチ時間スケール」も見よ 14, 15, 17, 22, 23, 26, 107, 109, 117, 124, 143, 144, 155, 156, 181, 182, 224-226, 232, 245, 247, 253
 時間存在論 15, 25, 229
 時間単位 23, 243, 253
 時間的延長 →「延長主義」も見よ 138, 223
 時間窓 23
 時間論 12, 25, 245, 262, 263, 389
 志向性 (的) 105, 106, 111, 121, 122, 130, 147, 148, 152, 180
 自己受容感覚 →「固有受容感覚」を見よ
 自己組織化 (的) 106, 108, 109, 113, 139, 141, 143, 153, 179, 225, 387
 システム論 22, 23, 34, 181
 『思想と動くもの』 18, 28, 35, 50, 52, 53, 66, 94, 97, 219, 253, 269, 270, 283, 306,

307, 361
 『持続と同時性』 32
 失語症 62, 162, 177
 実在論 21, 226, 246, 315, 316, 318, 331, 391
 実証的形而上学 →「形而上学」も見よ 16, 50, 51, 53, 54, 58, 64, 65, 361
 質的研究 12, 15, 81-85, 87-91, 93, 99, 100
 失認 16, 162
 自動的再認 144, 238
 支配的記憶 166, 243, 374, 375
 自閉症 28, 104, 140, 141, 161
 思弁 18, 44, 204, 238
 シミュレーション説 (記憶の) 234, 254
 社会学 54, 55, 58, 59, 64, 90, 182, 287
 社会心理学 12, 15, 30
 写像 292, 293, 297
 自由 42, 43, 82, 89, 104, 110-112, 114, 116, 129, 147, 171, 173, 212, 275, 339, 340, 344, 346, 348, 353, 355, 356, 381, 386, 389-394
 重位相 325, 330, 336, 337
 習慣 74, 140, 177, 178, 180, 242, 284, 347, 349, 355, 373, 390
 宗教 (哲学) 31, 180, 295, 298
 集合的記憶 57, 275, 282, 287, 307, 309
 収縮 →「凝縮」「縮約」も見よ 374, 375
 縮約 →「凝縮」「収縮」も見よ 17, 26, 339, 346-351, 353, 355, 356, 358, 361, 362, 386-388
 『種の起源』 14
 準安定的 321, 325, 332, 336
 純粹記憶 15, 24, 29-31, 46, 76, 77, 125, 131-136, 166, 175, 230, 232-234, 236, 237, 239-244, 246, 248-250, 253, 257, 258, 287, 289-291, 293-296, 299, 300, 310, 345, 372, 376, 381
 純粹経験 290, 291
 純粹持続 291, 293, 344
 純粹知覚 21, 71, 72, 238, 289, 345, 354, 359, 388
 常識 69
 状態 272, 273, 276, 277, 286, 287, 306, 364, 370
 初期値 143
 触発 20, 91-93, 99, 161
 進化 (論) 16, 22, 156, 182
 神学 55
 人格 20, 90, 134, 171, 247, 255, 359, 389
 神経科学 →「脳科学」も見よ 12, 15, 270
 神経系 22, 122, 124, 161, 185, 319, 326,

372, 373
 神経現象学 105
 神経心理学 173
 神経ダーウィニズム →「ダーウィニズム」も
 見よ 185
 人工知能 12, 15, 22-24, 36, 120, 125, 126,
 129, 131, 135-137, 139, 145, 150, 151,
 153, 156, 157, 160-163, 165, 169, 173,
 175, 179, 181, 183-186, 188, 329
 心身問題・心身結合(合一) 12, 16, 47, 59,
 61, 63, 65, 122, 296, 339, 345
 深層学習 →「ディープラーニング」も見よ
 15
 身体 12, 23, 42, 44-47, 57, 70, 71, 73, 10
 5, 106, 116, 121-124, 126, 127, 129-13
 1, 133, 144-147, 152, 154-158, 160, 16
 1, 170, 173, 178, 179, 181, 185, 186, 23
 4, 236, 239, 242, 249, 250, 270, 275, 28
 4, 285, 296-303, 310-312, 319, 321, 32
 4, 328-334, 339, 344, 345, 368, 378, 37
 9, 389, 390
 伸張 →「extension」「拡がり」も見よ 36
 1, 387
 振動 26, 61, 347, 349, 350, 352, 353, 35
 5, 380, 388
 神秘哲学(主義) 153, 163
 シンボル・グラウンディング問題 145, 186
 心理学 12, 14, 18, 25, 30, 40, 41, 47, 48,
 60-62, 64, 182, 229, 246, 266-268, 270-
 279, 285-287, 304, 323, 324, 359

 推移性(的) 215-218, 223
 随伴現象説 122, 124, 125, 138
 数的同一性 →「同一性」も見よ 30, 224, 2
 28, 234, 235, 241-246, 248, 249
 図式 →「運動図式」も見よ 15, 26, 27, 97,
 99, 284, 326, 327, 329, 343, 354
 スピリチュアリズム 12, 60, 62, 76, 390, 3
 91, 394
 スロー・フィーチャー・アナリシス(SFA)
 143, 156

 生(生命) →「生の哲学」も見よ 15, 40-
 48, 57, 63, 82, 85, 97, 99, 141, 149, 183,
 214, 253, 275, 300, 301, 303, 312, 321,
 326, 328-331, 335, 340, 341, 344, 354-
 356, 380, 392
 性格 149, 158, 247
 正確さ・精度(precision) 17, 63, 245
 生氣論 40-42, 44-47, 49, 181, 182
 政治学 48
 精神医学 15, 22, 29, 160

『精神のエネルギー』 35, 94
 精神病理学 →「病理学」も見よ 12, 28, 46,
 47, 160-162, 164, 165
 生成 68, 72-74, 77, 78, 98, 112, 115, 117,
 123, 124, 129, 130, 144, 154, 164, 181,
 182, 229, 311, 317, 321-325, 329, 330,
 332, 334, 337, 348
 生態学 123, 128, 144, 147, 156, 285, 329
 成長ブロック →「ブロック宇宙」も見よ 1
 90, 219, 229, 262
 生の哲学 13, 43, 44, 333
 生物学 12, 14, 18, 25, 48, 51, 54, 55, 57,
 64, 70, 144, 148, 300, 324, 325, 328, 32
 9, 390
 生への注意 →「生」も見よ 47, 132-135, 1
 52, 179, 180
 生理学 12, 36, 57, 59, 62, 64, 65, 81, 85,
 86, 99, 182, 250, 304, 349, 350, 370
 世界内存在 104, 168
 絶対無 289, 291-297
 ゼロポイント 153, 154, 159
 線イメージ 261-263
 選言主義(説) 25
 潜在性(的) 15, 21, 22, 68, 69, 75-78, 9
 0-93, 97-100, 140, 166, 175, 180, 183, 1
 92, 202, 207, 232, 233, 241, 243, 247, 2
 49, 255, 257, 258, 287, 289, 294, 296, 2
 99, 326, 376, 394

 想起 20, 21, 30, 35, 82, 85, 86, 125-127,
 129, 130, 132, 140, 157, 166, 225, 232-
 235, 239-244, 246-250, 254, 255, 257-2
 59, 266-269, 272, 305-309
 総合 18
 相互作用 22, 23, 26, 105, 106, 114-116, 1
 22, 124, 126, 127, 145, 152, 155, 178, 1
 92-194, 208, 212
 相互作用説 15
 創造(性) 21, 35, 42, 43, 45, 46, 48, 77,
 82, 88, 91, 93, 100, 114, 117, 127, 137,
 167-169, 171, 173, 214, 311, 312, 317,
 333, 334, 355, 387
 『創造的進化』 11, 12, 16, 32, 40, 43-45, 4
 8, 52-54, 66, 68, 69, 77, 80, 85, 94, 171,
 177, 178, 180, 181, 184, 212-214, 286,
 287, 310, 312, 327, 328, 331, 333, 334,
 337, 341, 354, 361, 362, 390, 392
 相対性理論 12, 15, 27, 28, 132, 162, 163,
 190, 194, 203, 204, 206, 219, 253, 364,
 384
 創発 23, 104, 117, 154, 182, 204, 208, 2
 22, 224, 276, 279, 325

粗視化 22
 ソース問題 254
 素粒子論 162
 存在論 21, 25-27, 29, 52, 98, 120, 153, 160, 182, 192, 205, 224, 229, 231, 245, 253, 257, 259, 267, 289, 332, 363, 364, 366, 378, 388
 ゾンビ 120, 169

た

ダーウィニズム →「神経ダーウィニズム」も見よ 171
 多元論 22, 26, 224, 253
 他性（他者性） 76, 78, 100
 多世界解釈 192
 多様体 20, 26

遅延 14, 17, 22-24, 36, 104, 117, 124, 138, 145, 148-151, 154, 155, 157, 158, 224, 247, 251

知覚 12, 14, 18, 20, 21, 29, 43, 49, 70, 78, 82, 86, 87, 97, 98, 106-110, 127, 129, 134, 185, 224, 225, 233, 238, 254, 255, 263, 267-273, 276, 280, 294, 295, 297, 300, 318-322, 324, 325, 327-329, 335, 347, 351, 352, 354, 357-359, 372, 379, 387, 390

知覚の哲学 12, 25

知性 16, 45, 48, 52, 71, 86, 89, 128, 131, 156, 167, 171, 284, 311, 328, 333, 382

チャンク化 140, 166, 284

注意 77, 82, 127, 133, 284

注意の再認 144, 238, 243

中央クロック 23

中央実行プロセス 268, 283, 284

中一元論 15, 208-210, 222, 263

チューリングマシン 139, 140, 179, 186, 187

超越論的 152, 209, 315

聴診 13, 18, 20, 245, 246, 252

重複倍加 330

直接実在論 209

直接想起説 249

直観 26, 45, 48, 52, 70, 71, 79, 88, 89, 91, 98, 167, 171, 229, 245, 296, 297, 299, 333, 339, 344-347, 349, 351, 352, 355, 359, 360, 386, 388

対世界 123

ディープマインド 139

ディープラーニング →「深層学習」も見よ 14, 106, 136, 187, 372

出来事 28, 30, 69, 89, 92, 125, 131, 140, 166, 190, 194, 195, 201, 205, 206, 210, 221, 224, 230, 231, 234, 235, 238-247, 249, 250, 255, 266, 268, 269, 275, 287, 297, 300, 304, 306, 307, 364, 369, 370, 372, 373

天文学 53-55, 67

テンポ 83, 87

同一性 →「数的同一性」も見よ 30, 163, 164, 185, 375, 376

同一説 208

統合失調症 29, 104, 164

統合性（的） 363-368, 371-381, 388, 389

同時性（的）・共時性（的） 70, 216-218, 223

同時性（的） 70, 71, 73-76, 78, 98, 190, 201, 217-219, 294

同時生成 →「現在と過去の同時生成」を見よ
 等質的 26, 27, 224, 284, 339, 341, 347, 359

投射 125, 144, 145

道徳 15

『道徳と宗教の二源泉』 11, 12, 31, 51, 66, 180, 309, 312, 390, 392, 394

動物行動学 320, 338

動物主義 164

独我論 21, 30

独断論 61

トップダウン 105-108, 116, 124, 145-148, 178

トポロジー（トポロジカル） 317, 321, 323, 338, 364, 368, 371, 377, 384

トラウマ 270, 273, 275, 282

な

二元論 15, 36, 45, 46, 48, 60, 77, 98, 120-122, 124, 136, 208, 221, 224, 247, 275, 315, 328, 329, 332, 333, 339, 340, 345, 346, 381

二重化 71, 98, 294, 322-324, 330, 332, 338

二重知覚説 →「ハイブリッド説」も見よ 145

日本哲学 12, 31, 302

ニューラルネットワーク 17, 23, 106, 107, 111, 112, 117, 136, 139, 142, 161, 165, 186-188

人間行動学 334

認識論 12, 16, 52
 認知科学 14, 15, 225, 289
 認知システム 268-271, 283, 284
 認知神経科学 104
 認知心理学 12, 15, 271, 283
 認知的侵入 225

 ネオテニー 332, 338

 脳科学 →「神経科学」も見よ 14, 112, 289
 脳型ロボット 15, 23, 104, 105, 109

は

バイアス →「確証バイアス」も見よ 44
 ハイブリッド説 →「二重知覚説」も見よ 2
 5, 139, 140, 145, 147, 238
 パーセプトロン 186
 ハード・プロブレム 120
 バックプロパゲーション 143, 149, 187
 発生論 16, 17, 45, 81, 99, 230, 321, 324,
 329, 331, 333
 発達心理学 104, 123
 発明 20, 93, 100, 214, 286, 314, 325-329,
 333, 334, 386
 場の量子論 201-204, 207, 220
 ハミルトニアン 203
 汎質主義(論) 15, 137, 138, 247
 反射 31, 70, 124, 146, 148, 149, 152, 16
 1, 177, 186
 汎心論 15, 24, 25, 27, 189, 208-210, 212
 汎神論 391

 美学 →「分析美学」も見よ 15, 20, 25, 13
 7
 ヒステリシス 167
 非線形 104, 105, 108, 115
 PTSD 141
 批判的 40-49, 275
 微分 59, 100
 表現的有 237, 240, 249, 250
 病理学 →「精神病理学」も見よ 12, 18, 46,
 47, 65, 156, 162
 拡がり →「伸張」「extension」「延長」も
 見よ 15, 26, 27, 339, 341, 345, 358, 38
 7

 不可逆性 231, 239, 241, 274
 不確定性(非決定性) 42, 43, 49, 61, 82, 1
 04, 155, 175-180, 190, 192, 193, 296, 3
 56, 372, 378, 379, 391-393
 不可侵性 →「過去の不可侵性」を見よ

複現可能性 235, 240-242, 244, 248
 複雑系 104
 付随現象説 →「随伴現象説」を見よ
 物理学 12, 16, 25, 27, 28, 35, 53-55, 57,
 88, 108, 120, 157, 162, 167, 190-192, 1
 94, 196-198, 201, 203-205, 207, 208, 2
 13, 218, 236, 286, 300, 332, 337, 349, 3
 50, 380, 384
 物理主義(物質主義) →「唯物論」も見よ
 21, 62, 225, 253, 318
 普遍学 60
 普遍者 240, 241, 248, 249
 普遍論争 144
 フラクタル 144
 フレーム問題 186
 プロセス・モニタリング 234
 プロセス問題 254
 ブロック宇宙 →「成長ブロック」も見よ 2
 04-207, 210-212, 214, 219, 221, 228, 2
 53, 259
 分業 124
 分析形而上学 12, 289, 388
 分析哲学 24, 32, 68, 262
 分析美学 →「美学」も見よ 12
 分類の法則 54-56, 58-60, 62, 64, 182
 並行論(心身並行論) 50, 57-61, 63-65, 3
 61
 並進(translation) 170, 375, 376
 ベイズ推論 →「逆ベイズ推論」も見よ 141,
 142
 ヘップ則 187
 ヘプタポッド 195, 197, 199, 201
 偏極 327, 334, 337
 変分原理 196, 198-204, 213, 220

 ボイエーシス 296-299, 334
 包摂 72, 73, 98
 方法論 231
 ボクソロジー 273
 ポスト構造主義 12
 ポストディクション 108, 111, 112, 169
 保存 30, 64, 124, 125, 140, 166, 224-232,
 234-236, 239, 241-247, 249, 250, 253-2
 55, 258, 287, 289, 290, 304, 306, 323, 3
 36
 保存主義 255
 ボトムアップ 105, 106, 129, 145, 146, 16
 0, 178
 ホメオスタシス 334
 ホモ・ファベル 180, 310
 ポリフォニー 124

ポリリズム 20, 81, 82, 84, 89, 124, 276
 本性の差異 120, 227, 228, 231, 294, 352

ま

曲がり角（転回点） 97, 100, 344, 353, 355, 362
 マルチ時間スケール →「時間スケール」も見よ 14, 23, 107, 111, 112, 117, 124, 126, 143, 156, 232, 240, 247

見かけの現在 210, 211, 222, 260, 261
 未完了（相） 175, 178, 179, 237, 249, 254, 257, 258
 ミンコフスキー時空 27

無意識 75, 76, 112, 113, 116, 213, 294, 305, 309, 370
 無秩序 16, 52
 ムネメ原因 24, 170, 230, 254
 無の鏡 31, 293, 295, 299

メアリの部屋 120
 メタ時間 260, 261
 メタファー 170
 『メッセージ』（映画） 194, 199, 220
 メレオロジー（メレオロジカル） 363, 364, 366-371, 378, 380, 383, 384, 388, 389
 メロディー 82, 83, 86, 367, 368, 382

盲視 145
 目的論 168, 178, 181, 201, 213, 214, 363, 372
 問題設定的 326, 336

や

唯物論 →「物理主義」も見よ 122, 380
 有機性（的・体） 13, 121, 181, 274, 316-322, 324, 325, 327, 329, 330, 335, 336, 366, 379, 387, 391
 有限性 45
 有用性（的） 30, 55, 128, 140, 141, 149, 150, 169, 387
 夢 74, 77, 147, 149, 150, 222, 294, 295,

316, 350

予見不可能性 82-84, 91, 92, 95, 99, 169, 171, 175, 183, 213, 214, 393
 四次元（主義） 15, 25, 27, 200, 201, 205, 206
 予測エラー 107-110, 113, 115-117, 142, 149, 155, 164
 西原因説 236

ら

ラグランジアン 203, 205, 221
 楽観主義 19
 ラブラスの魔 178, 213
 ランジュバン方程式 142

リカレント →「再帰的」を見よ
 力学（ダイナミクス） 54, 77, 106, 108, 110, 112, 126, 139, 141-143, 149, 151, 160, 161, 167, 177, 178, 185, 269
 リズム 22, 83-85, 87, 88, 99, 110, 155, 224, 247, 259, 330, 347-352, 376-379, 381, 382, 385
 量子もつれ 194
 量子力学 12, 27, 28, 162, 190-193, 203, 204, 207, 213, 219, 221, 301
 臨界的 161, 168, 325, 327
 倫理学 12, 25, 48, 137, 334

例化 248, 249
 歴史 15, 296, 298-300, 309-313, 322, 329, 330, 350, 351, 356
 連合主義 234
 連続創造説 228, 229

ロボティクス 12, 157
 ローレンツ不変式 163
 論理学 16, 182

わ

ワーキングメモリ 139, 140, 268, 275, 284
 『笑い』 32, 183

●著者紹介（掲載順）

フレデリック・ヴォルムス（Frédéric Worms）パリ高等師範学校・教授。現代フランス哲学。1964年生。著書、『Introduction à “Matière et mémoire” de Bergson, PUF, 1997. *Le vocabulaire de Bergson*, Ellipses, 2000. *Bergson ou Les deux sens de la vie : étude inédite*, PUF, 2004.

ポール＝アントワヌ・ミケル（Paul-Antoine Miquel）トゥールーズ大学・教授。現代哲学、フランス哲学、生物学の哲学。1959年生。著書、『*Sur le concept de nature, hermann*, 2015. *Bergson dans le miroir des sciences*, Kimé, 2014.

村上靖彦（むらかみ・やすひこ）大阪大学人間科学研究科・教授。現象学的な質的研究。1970年生。著書、『在宅無限大——訪問看護師が見た生と死』、医学書院、2019年近刊、『母親の孤独から回復する——虐待のグループワークに学ぶ』、講談社、2017年、『仙人と妄想デートする——看護の現象学と自由の哲学』、人文書院、2016年。

増田靖彦（ますだ・やすひこ）龍谷大学・教授。哲学、現代思想。1967年生。共著、『交域する哲学』、月曜社、2018年、『メルロ＝ポンティ哲学者事典』別巻、白水社、2017年。翻訳、ベルクソン『笑い』、光文社、2016年。

谷 淳（たに・じゅん）沖縄科学技術大学院大学・教授。認知脳ロボティクス。1958年生。著書、『*Exploring Robotic Minds : Actions, Symbols, and Consciousness as Self-Organizing Dynamic Phenomena*』Oxford University Press, 2016.

三宅陽一郎（みやけ・よういちろう）日本デジタルゲーム学会・理事。デジタルゲームにおける人工知能の研究・開発。1975年生。著書、『人工知能のための哲学塾』、ビー・エヌ・エヌ新社、2016年、『人工知能のための哲学塾 東洋哲学篇』、ビー・エヌ・エヌ新社、2018年、『人工知能の作り方』、技術評論社、2016年、『ゲーム情報学概論——ゲームを切り拓く人工知能』、伊藤毅志・保木邦仁との共著、コロナ社、2018年。

三宅岳史（みやけ・たけし）香川大学教育学部・准教授、博士（文学）。哲学、西洋哲学史（フランス近代）。1972年生。著書、『ベルクソン哲学と科学との対話』、京都大学学術出版会、2012年。論文、「リーマンと心理学、そして哲学」、『現代思想 臨時増刊号 総特集・リーマン』、青土社、2016年。

バリ－・デイントン（Barry Dainton）リバプール大学・教授。形而上学、心・意識・自己の哲学。1958年生。著書、『*Time and Space*, Routledge, 2nd edition 2010. 論文、“Bergson on temporal experience and durée réelle”, Ian Phillips, *The Routledge Handbook of Philosophy of Temporal Experience*, Routledge, 2017. “Natural Evil : the Simulation Solution”, *Religious Studies*, 2018-11-10.

伊佐敦隆弘（いさしき・たかひろ）日本大学経済学部・教授、博士（文学）。哲学的時間論・分析形而上学・ウィトゲンシュタイン研究。1956年生。著書、『時間様相の形而上学——現在・過去・未来とは何か』、勁草書房、2010年。論文、「何が記憶を一行に並べるのか?」、『ベルクソン『物質と記憶』を解剖する——現代知覚理論・時

間論・心の哲学との接続』、平井靖史・藤田尚志・安孫子信編、書肆心水、2016年。

スティーヴン・D・ブラウン (Steven D. Brown) オープン大学・教授。現代フランス哲学、心理学の哲学。1968年生。P.Reavey との共著、*Vital Memory and Affect: Living With a Difficult Past*. London : Routledge, 2015. P. Reavey との共著論文、“Embodiment and place in autobiographical remembering : A relational-material approach”, *Journal of Consciousness Studies*, 25 (7/8) : 200-224, 2018. D.Middleton との共著、*The Social Psychology of Experience : Studies in Remembering and Forgetting*. Sage, 2005.

杉村靖彦 (すぎむら・やすひこ) 京都大学大学院文学研究科・教授。宗教哲学、現代フランス哲学、京都学派の哲学。1965年生。藤田尚志・安孫子信との共編著、*Mécanique et mystique. Sur la quatrième chapitre des Deux Sources de la morale et de la religion de Bergson*, OLMS, 2018. 翻訳、田辺元「社会存在の論理」第3章(ベルクソンの『二源泉』の批判的受容)の仏訳と解題、Hajime Tanabe, *La logique de l'être-social*, chap. 3, *Annales bergsoniennes VI*, PUF, 2013. ミシェル・ダリシエ、永井晋との共編著、*Philosophie japonaise. Le néant, le monde et le corps*, J. Vrin, 2013.

伊東俊彦 (いとう・としひこ) 相模女子大学人間社会学部・准教授。ベルクソンを中心とするフランス社会思想。1976年生。論文、「創造としての自由——ベルクソン『道徳と宗教の二源泉』における社会論」、『社会思想史研究』第40号、2016年、“Fonction fabulatrice et narration”, *Considérations inactuelles Bergson et la philosophie française du XIXe siècle*, Georg Olms Verlag, 2017.

アンヌ・ルフェーヴル (Anne Lefebvre) 高等師範学校パリ・サクレイ校・講師。現代フランス哲学、技術とデザインの哲学。1978年生。論文、“Critères, degrés et dépassement de l'individualité dans la philosophie de Gilbert Simondon”, Ph. Lacour, J. Rabachou et A. Lefebvre (dirs.), *Approches de l'Individuel. Epistémologie, logique, métaphysique*, Editions Rue d'Ulm, 2017.

平光哲朗 (ひらみつ・てつろう) 神戸学院大学人文学部・講師。哲学、哲学史。1973年生。論文、「ベルクソンにおける直観を構成するものとしての人格について」、『メタフシカ』第44号、2013年。

永野拓也 (ながの・たくや) 熊本高等専門学校熊本キャンパス・教授。ベルクソン哲学。1967年生。翻訳、マリー・カリウ『ベルクソンとバシュラール』、法政大学出版局、2005年。著書、『ベルクソンにおける知性的認識と実在性』、北樹出版、2011年。論文、「ベルクソンと特殊相対性理論——物理学的表象と形而上学的実在性」、『合理性の考古学』、東京大学出版会、2012年。

谷口 薫 (たにぐち・かおる) 四国大学文学部・教授。ベルクソンを中心に近現代フランス哲学。1970年生。論文、“Fonction fabulatrice et intelligence dans les Deux sources”, *Tout ouvert — Evolution créatrice en tout sens*, Georg Olms Verlag, 2015. 共著、『哲学という地図』、2010年、勁草書房。論文、「ベルクソンと新渡戸稲造」、『新渡戸稲造の世界』第26号、2017年。

● 記者紹介（掲載順）

天野恵美理（あまの・えみり） 大阪大学大学院文学研究科・博士後期課程。ベルクソン哲学。1984年生。論文、「ベルクソンにおける外界についての一考察——『意識の直接与件についての試論』から『物質と記憶』第四章にかけて」、『待兼山論叢』、大阪大学大学院文学研究科、51号、2017年、「ベルクソン『物質と記憶』における「私の知覚」の形成段階について——二章のヴァリエーションとの比較を通じて」、『メタフシカ』第46号、大阪大学大学院文学研究科哲学講座、2015年。

石渡崇文（いしわたり・たかふみ） 東京大学総合文化学部・博士課程。ルートヴィヒ・ビンスヴァンガー研究。1984年生。論文、『『症例エレン・ウェスト』とルートヴィヒ・ビンスヴァンガーの現存在分析』、『哲学・科学史論叢』第20号、2018年。

木山裕登（きやま・やすと） トウールーズ大学（博士・哲学）。ベルクソンを中心とする19世紀フランスの哲学・心理学。1987年生。論文、「ベルクソン「意識の諸平面」概念の心理学的背景」、『論集』32、東京大学大学院人文社会系研究科哲学研究室、2013年。翻訳、ベルクソン『時間観念の歴史 コレージュ・ド・フランス講義 1902-1903（仮題）』、藤田尚志、平井靖史、岡嶋隆佑共訳、書肆心水、近刊予定。

山内翔太（やまうち・しょうた） 甲南大学・非常勤講師。ベルクソンを中心とするフランス・スピリチュアリズムの哲学、および西田幾多郎を中心とする日本哲学。1990年生。論文、「優美と英雄——ラヴェッソンの目的論と神論」、『宗教哲学研究』35号、2018年、「潜在的本能としての道徳と宗教——ベルクソンにおける「閉じたもの」について」、『西日本哲学年報』25号、2017年、「主要著作ガイド『現代フランス哲学講義』」、『現代思想 臨時増刊号 総特集・九鬼周造』、青土社、2017年。

米田翼（よねだ・つばさ） 大阪大学大学院人間科学研究科・博士後期課程。フランス哲学、生物学の哲学、科学思想史。1988年生。翻訳、シモンドン『個体化の哲学——形相と情報の概念を手がかりに』、藤井千佳世、近藤和敬、中村大介、ローラン・ステリン、橘真共訳、法政大学出版局、2018年。論文、「ベルクソンとヴァイスマンの遺伝論」、『フランス哲学・思想研究』21号、2016年、「自然的システムとしての生物——ベルクソンとル・ダンテクにおける個性と老化の問題」、『フランス哲学・思想研究』23号、2018年。

山根秀介（やまね・しゅうすけ） 舞鶴工業高等専門学校・講師。ウィリアム・ジェイムズの哲学。1987年生。論文、「ウィリアム・ジェイムズの多元的存在論とベルクソンの持続的存在論」、『宗教哲学研究』第33巻、2016年、「ベルクソン『試論』における「持続」の一と多」、『宗教学研究紀要』第10巻、2013年。翻訳、セバスチャン・ミラヴェット「哲学と認知心理学を定義する——ベルクソン哲学の知覚理論とブルーナーの認知心理学の分析を通して」、『ベルクソン『物質と記憶』を解剖する——現代知覚理論・時間論・心の哲学との接続』、平井靖史・藤田尚志・安孫子信編、書肆心水、2016年。